
IS イタリアの姫と不遇な機体

御堂 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS イタリアの姫と不遇な機体

【Nコード】

N9474S

【作者名】

御堂 光

【あらすじ】

イグニツシヨンプラン。欧州の主力ISを決定するその計画にトライアルしたのがBT兵器を擁するイギリス・ブルーティアーズ。そしてAICを搭載したドイツからの刺客シュヴァルツェア・レーゲン。……あれ、これだけだったっけ？ 何かが足らなくない？ なんか、いたような……？

そんな某フリー百科事典にも載せられていない、なんだかものすごく不遇な扱いにされているイグニツシヨンプラン参加機体が優秀なパイロットを乗っけて駆け抜ける……。そんな物語になる予定。

まあ、初心者ながらに頑張ります。暇なら目を通していただければ幸いです。

prologue 変態と不遇とここに極まる(前書き)

初投稿です。

なんだかようわからん物語ですが、お付き合いしていただければ幸いです。

感想・誤字報告・矛盾点等ありましたらお気軽に感想をお書きください。

作者の励みになりますので。

それではどうぞ！

prologue 変態と不遇さここに極まる

イギリス、ティアーズ型。

ドイツ、レーゲン型。

そして私の祖国のイタリアが誇るIS、テンペスタ？型。

いずれも欧州のイグニッションプランにトリアルしている機体だ。一番手はイギリス。安定的な性能と抜群の操作性でトップに躍り出た。といっても結局のところ今のところできあがっているのは試作型の第三代兵器一号機、フルティアーズ 蒼い雫のみというのはイタリアには知れ渡っている。

レーゲン型を要するドイツでは、一步出遅れはしたもののAICとアクティブイナードシャルキャンセラーという慣性制御を任意的に行うという独創的な第三代兵器で勝負をかけてきた。

それなのに、我が祖国では。

「は。俺は女の尻を追っかけている方が幸せなのさ。男は女のために働く。こうでなきゃな？」

「ならさっさと働いて下さい。もうライバルは動いているののうちだけ完成していませんですよ！」

女性の罵声が狭い研究室に響きわたる。それでも誰も気にした様子はない。せいぜいが、またいつものが始まったか程度。いい加減にしてほしいと思うのは私だけじゃないはず。

世界は変わった。インフィニットストラトス ISの台頭によって。

IS。古代の常識を一気に覆したそれは、なぜか女性にしか扱うことが出来ない。それ故に古来からバカにされてきた女性の地位が飛躍的に上昇。昔は女の尻ばかり追ってきた頭がスカスカの男は一気にその存在価値を奪われた。元々あったかどろかはわからないけど。

「もうIS学園入学まで時間がないですよ！ このまま完成せずにいたら恥さらしですよ！」

「うるせえなあ。黙ってるよ主任。^{フランチェスカ}色気もへつたくれもないガキの癖に」

余裕の笑みを浮かべた駄目男（何で研究所でたばこ堂々と吸ってるのかしら？ 私には理解することが出来ない）がそう挑発すると、フランカはピンク色の長髪を逆立てた。

「ガキじゃありません！ 一体何回言えば理解するんですかこの単細胞！ 煩惱の固まり！ 歩く生殖器！ 移動する公衆便所！」

「ちょ、このガキ何いってんだよ！ ああ俺はそんなんじゃないかな？ 勘違いするなよ？」

「知っているわ。もう何でもいいからさっさと仕事して頂戴。いい加減にしておかないと国に首切られるわよ？ 物理的に」

「ああもうわかったよ！ 愛しのハニーのためにいつちょジョニーがたつてやる」

「最低よね、その言い回し。というか働からないの？ なら死んで私に遺産全て託して。ええそれが良いわね。愛しているわ。だから遺産は私名義でお願いね？」

「ああなんか嬉しいこと言われたはずなのに素直に喜ぶことができない！ そんな冷たい……愛がお金に換算されるなんて！ ハニー、目を覚ますんだ！ 私の愛しい、愛しいマイハニー！」

「はあ。何で私の周りにはこんなのばかりなのかしら？ 正直分からないわ。分かりたくもないけれど。仕事してくれといったのにも関わらず起動しているのが下半身だけって。もう何を言っているのか。下半身生物の呼応名称はギル。本名？ 興味なんて初めから持ち合わせていないし、なんか言ってた気がするけれど忘れた。まあ人間忘れたと言っても正確なところ記憶の図書館である海馬の奥深くに押し込めすぎて取り出しが不可能になっているだけらしい。誰かが言ってるわ。……下半身生物のことを考えるときはなぜかどうでもいいことを考えてしまうわ。本当に、頭が痛い。」

「いい加減相手をするのも鬱陶しくなってきた私は、ぶるぶると振動している変態の顔面に催涙スプレーを吹きかける。うめく変態。撃

退完了。それではまだオーバキルになっていないので、催涙スプレーによって被弾し、傷ついた眼球にレモンの成分と同等の液体を流し込んだ。地面に転がっている変態を無視してその催涙スプレー（痴漢撃退用。用法として間違っていないこともない）をフランチェスカ主任に手渡す。そしてついでに先ほど使用したレモン液も一緒に。

フランチェスカが私の顔をまじまじとみてる。次に瓶に入った催涙スプレー、とレモン液。私とそのまましばらく行ったり来たりするループ。

「変態撃退用です、主任。悪は滅びるべきかと」

その言葉を聞いたフランチェスカは顔を綻ばせた。お気に召したらしい。

「ありがとう！ 頼りになるのはやっぱりあなただけだね！ ほんとあなたが居てよかった！」

そのまま目尻に涙を浮かべて、私に抱きついてくる。まあ私は血も涙もない人間ではない。傷ついた人間を突き飛ばすことは躊躇った結果、躊躇っている間に主任が復活した。ぎゅうぎゅうと抱かれる身体は女性らしく肉が付いていないせいか、少し角ばって痛い。それを言うと泣き出して収拾がつかなくなっただけで作業どころじゃなくなるって知っているから私は何も言わないけれど。……決して主任をめんどくさがっているわけじゃないわ。

「さあ！ さあさあさあ！ これの餌食になりたくなければ、働くのだ！ 屑ども、今こそ動け！」

「ぎゃあああああああ！ わかったわかった！ 働くからそれは勘弁！」

ここの研究所の一番の屑で尚且つゴミであるギルが降参して仕事を始めると、だらけていた他の職員も一斉に動き始めた。

働き始めればここのスタッフも優秀だ。だてに国家プロジェクトであるテンペスタ？の開発を任されているわけではない。

「待っててね！ 絶対学園入学式までにテンペスタ？を完成させて

ど野暮でもない。首につけられたチョーカーをみれば彼女がどんな存在なのかイヤでも理解できてしまうからだ。

強化人間。筋肉・神経系を中心としてあらゆる部分に手を付け、文字通り強化した「人間」。体が衰えないように定期的に薬剤を接種しなければならぬモルモットだ。

全てはISのせいだ。が、これはひとまずおいておく。ようは彼女は普通の人間ではないのだ。人の手無くして生きていけない、人形とペットのはざまの生物。それが彼女の正体だ。普段研究員からは番号で呼ばれているところしか私は見ていない。

「私も逃げたい、な」

「ごめんなさい」

彼女の前では禁句だった。彼女たちには自由など存在しない。日々実験を繰り返して、最後にはゴミのように。

突如、思考を遮断された。視界を急に遮られたからだ。誰かと言わずとも、その場には彼女しかいなかった。目に添えられた形で触れている手は、人独特の体温を感じることが出来る。

「考えないの。もうすぐ門出でしょ？」

「そうね。ごめんなさい」

「すぐそうやって謝る。悪い癖だよ？」

「……すぐに直ったら苦労しないわ」

「たしかにね」

そこまで話すと会話が途切れる。もう喋るべき事項もない。それでもその沈黙は、けつして悪い沈黙ではない。気まずいわげじゃなくて、わざわざ口に出さなくとも言いたいことの代替が理解できる。その何かあったかいものにくるまれているような感触を、雰囲気を感じて楽しむ。

「ねえ」

彼女がふと声を上げた。憂いを帯びたその声にどう反応したらいいかわからず、私は顔を背けたまま黙っている。

彼女はそれに別段気にした様子も見せず、そのまま問いかけた。

「あなたは、どんな色？」

色。漠然と言われたところで、そんなことはわからない。そもそもその質問にはどんな意味があるのだろうか？ その質問の意図をつかもうとあぐねている私を置いて、彼女は続ける。

「私はね、白。汚れなき純白と言えば聞こえがいいのかもしれないけど、私にとってはそうじゃない。白とは、ないこと。無知、無価値、無意味。私の生きたその意味なんかきつとなくて、誰にも理解されずに。誰にも関心を向けられずにきつと死んでいく」

なんと悲しいことだろうか？ それではまるで生きていたことを認められないと一緒ではないか？ 生きていたという事実のそのものをすべて否定されたら一体何が残るといえるのか？

そんな私の思考を汲んだのか、彼女は唇の端っこを少しつり上げた。口の周りの筋肉を使って唇のエッジを下方に引っ張る偽りのほほえみとは違う、本当の笑み。まつげから流れ落ちた雫と相まってそれは私は物語の世界に迷い込んでしまったかのように錯覚した。それほどまでに人間らしい表情を作ることが出来たのかと、私は失礼ながら驚いた。

そしてその事実気がついた瞬間、私は彼女の機械的な一面しかみていなかったのかと過去の自分に愕然とした。余りに狭い視野には彼女の能面のような表情しか焼き付いていなかったのだ。私が一方的に理解したように話しかけていた会話だって、彼女の優しさに甘えていただけだった。確かに無感情ではないことを知っていたはずなのに。彼女が人間であるということを知っていたはずなのに。私は都合の悪い時だけ彼女の姿を追いかけて、彼女にすがっていたのだ。

涙を自分の人差し指ですくいとって、彼女は目尻を下げた。

「もう私は死ぬ。あれに言わせれば機能を維持できなくなる故に解体、だったかな？ それでも私は後悔していない。せずに済んだんだよ」

彼女が腕を伸ばして、私を引き寄せた。抵抗する意志もない私は簡

単に引き寄せられた。

「あなたに出会えたから、私の白は無意味じゃなくなった。たとえば世界中の人間に忘れられようと、あなただけは覚えていてくれるから。私の存在は無意味じゃなかったって言い切れる。ありがとう、私の一生をくれて」

「ずるいわ」

本当に、ずるい。そんな告白をされては返す言葉もない。言いたいこと、言わなければと言うことがあるのにのに詰まったままできてくれない。

「困らせた？ ごめんね。ただ私は一言言いたかっただけなんだ。私は自分は白だと思っている。ただであなたはそうじゃないかもしれない。黒だと思う人もいるかもしれない。所詮自分なんてものは有象無象の一つでしかないの。人は自分が思っている以上に脆いものなの。気を付けなさい？ でないと今のように簡単にだまされるの」

「……は？」

急にいたずらっ子のような笑みを浮かべたミカエーラは私から体を離し、くるりとその場で一回転。囚人服を翻して、去り際に一言。

「残念、あなただまされちゃったの！」

殴って良いわよね、これは。

「待ちなさい。一発ですませるから」

「いやよ、あなた遅いんだもん 早く済ませないと男の人に呆れられてしまうわよ！」

「下品な言い回ししていると、ほんとにあの研究所の人間に見えてきて仕方ないわ。……まあいいわ、あなたが言っていて聞くという人間じゃないのはよく知っているから。そう、慈悲は請わないわ。いざ、覚悟！」

「捕まえてみなさい！」

そうして夜な夜な、私たちはしばらく童心帰りしたかのように施設の周りを走り回った。

……私だって、本当は気が付いている。これが彼女の本心で、今にも潰れそうな心を必死になってごまかしているということに。

「嘘が下手ね、ミカエーラ」

一人になった後につぶやいた言葉は、闇に紛れて見えなくなった。

彼女が言った、言葉。

あなたは、どんな色？

その答えを、本当の私は知っている。

「色って、そもそも何なのかしら？ あなたにはそれがわかってい
るのかしら、ミカエーラ？」

「もう一度言っていただけですか、いえ言えますよね？ というよ
りも言わないとシンボル切り落とすわよ？」

「ひい！ わかったから落ち着いてくれ」

入学式の三日前、私は懲りもせず研究所にいた。

本当はこの場所に居たくて居る訳じゃない。とある事情で、仕方な
くここに居るのだ。

「それをツンデレというのよだよ、お嬢ちゃん！」

「主任。刃物と何か詰めるもの、それと男のシンボルを切り落とす
のが大好きな人をここに。現代に社会に相応しい、見事な宦官を完
成させますから」

「僕の逸物が、台ピンチってごめんなさい本当に私が悪いございま
しただから主任電話をかけようとしなくて本当に申し訳ございません
でした！ 主任冗談ですからほらエマちゃんもなんかいつって
え？ 本気だって？ ちょっと待って冗談でしょう？ ねえ冗談だ
よね？ 冗談だ！ 三段活用、どうだ見たかってぎゃあああああ
ああああああああああ！ ごめんなさい！」

日本で言うところの土下座というポーズをとって、ボブ（正式名称
？ 三日で忘却済み。ちなみにその名称の由来は頭が爆発したかの
ようなボンバーな髪の毛だから）は平伏した。間抜けに見えること

この上ないのだけれど、今この場では丁度良い。私はボブの頭を蹴り付けた。

「もう一度、繰り返しなさい？」

「それをツ……ひいひいひいひいひい！ だから専用機がまだできあがっていないんですよお嬢様！ ああぐりぐりしないでえ！ やめて新世界への扉が開いちゃううううううううううううう！」

適当なところで汚物から足を離して、私はふつつつと沸き上がる怒りを何とかこらえる。

……なんだこれは？ 新手の嫌がらせなのか？ そもそも二日前になつてもまだ制御が甘くてこのままだと空中分解はまねがれないって本当に意味を問いただきたい。早急に。本当はそんなことをしている段階ではもうないのだけれども。そしてとりあえず足元は見なかったことにするに限る。見てしまったら最期、本当に放送起因し相当の光景が広がっていること間違いなしだから。ええ、怯えているわけではないわ。

「もう良い。謝っている暇があるなら今すぐ作業に取りかかりなさい！」

「サーイエッサー！」

「私の、どこを、どうみたら、男に見えるのかしら？」

そのまま顔に脂汗を滴らせて、ボブが持ち場に戻る。私の天使のような笑顔が、恐ろしいものに見えたのだろうか？ 隣をふと伺ってみる、何かに耐えるように小学生サイズのフランチェスカが震えていた。失礼な。まあ、それはいつたん置いといて。

この状況は、最悪とも言えるケースなのかもしれない。このままだと入学式どころか初授業から大分経過したところでの参人になってしまう。それはよろしくない。最重要監視対象の「イチカ・オリムラ」の性格・および好感度と観察にふさわしいポジションをつかむのに苦労する。そして何より、英国に出し抜かれたといつて政府が怒り出しかねない。私の微妙な立場を考えて、是非ともそれは避けたいところだ。それなら私がとれる選択など最初から一つしかあり

はしない。

「明日までに出来るだけ完成させておきなさい。完成しなかった部分については、私があつちに着いてから完成させるわ」

「おまちください！ それならば誰か専用のスタッフを！」

フランチェスカが慌てたようにこちらに詰め寄ってきた。いつもの崩れた顔とは違う真剣な引き締まった表情だ。

専用の技術者集団を持ってしても、未だに完成率は七十パーセント強程度に留まっているのだ。後の三十パーセント。それだけの膨大な量をたった一人でやり遂げようとするなどともではないが正気の沙汰ではない。それも今の数字は、機体コンセプトの基本設計段階に過ぎない。第三世代の特徴であるパッケージに至ってはいまだ卓上の域を出ていない。それは絶対に無茶だ。主任の表情は口の代わりにそう語っていた。

それでも私はそれを突っぱねた。時間がないのもそうだけれども、それよりも何より。

「私に恥をかかせる気ですか？ イタリア人は女性に大恥をかいっこいと国から送り出すのですか？」

「ふざけるな！」

私の挑発に、研究所の至る所から怒号が響きわたる。

フェミニスト思考（以前彼らが自分のことを指してこういった。もうそれ以来訂正するのも面倒でそのまま勘違いさせたまま放置している）をバカにされて、怒っているのだ。自分のアイデンティティを否定されたかのように烈火のごとく。

「たとえ屑と言われるのを甘受しよう。たとえ男として過ごしてきた自分の人生を否定されたとしても。俺たちには譲ってなならないものがある！ それはなんだ！」

「たとえ邪険に扱われようと、女性をあらゆるものから守ることです！」

「そうだ！ 野郎共！ なんとんでもテンペスタ？を仕上げるぞ！ たとえ誰が死のうとも、誰が精神崩壊しようともだ！ 手を止

めるな！ 休むな！ 我らはナポリの男だ！ 己の信念にかけてもやり遂げるんだ！ 女を俺たちが、護るんだ！」

「オー！」

「……ほんとに男って、単純なんだから」

愚かなままで、彼らは愚直だった。悪く言えば馬鹿。それ故に世の女性はそれに惚れるのだろうか。私にはわからない。なぜなら、私は男という生物が嫌いだから。

そんな地獄のような風景が広がっている背後を気にせず、私はその場を後にした。

かくいう私も、まだ日本に渡る準備が完璧というわけではないのだから。

結局のところ、テンペスタ？がイタリアの研究所で完成することはなかった。PICの一部とパッケージ、それからほぼすべての武装は完成することなく、私とともに極東の地日本へ旅立った。

……今更ながらに自己紹介。私の名前は、エマヌエーラ・モスカ。階級は一応大尉という地位に納まっている。

ちなみにいうと私の名前が研究所で一度も発されることがなかったのは、単に私の名前を知っているのものがいないせいだったりする。何度言っても覚ええないから私が諦めた結果だ。

というか名前もきちんと覚えていないのにもかかわらず、告白をしてくるあの研究所の人間はどこかおかしい。頭の構造を一度専門家にってもらったほうがいいと私は思っている。

そうして数多くいるイタリア人を「頭の固い集団」と位置づけて侮辱するその場のノリで生きる人間達に別れを告げて、私は本当に旅立った。

不覚にも、涙が零れ落ちそうになった。そう、ようやく私は変態どもから解放されたのだ！ そう小さく口に出して漏らしてしまった私は、果たしてどうなのだろうか？ なんてことを考えた私を、V

IP専用の飛行機は無言で載せていった。

prologue 変態と不遇とここに極まる(後書き)

お疲れ様でした。

何かありましたら、しこ連絡ください。

第一話 戦闘とお休み（不遇な機体）（前書き）

二話です。

何とか早めに仕上げることができましたが、どうでしょう？

……次も早めに更新できるように、頑張ります^^；

……あとの小説はどこに向かっているのでしょうか？

2011/05/07 タイトル改訂

2011/05/26 誤字修正

第一話 戦闘とお休み（不遇な機体）

一名の遅刻者が居る。その事実には織斑千冬は眉をつり上げた。一年のうちもつとも早いイベントである入学実技試験に、たった一人姿を現さなかった。

エマヌエーラ・モスカ。イタリア国家代表候補の新人だ。イグニツシヨンプランの最後発、テンペスタ？を率いてやってきたのだろう。英国が動き出したのを見て、慌ててイタリア政府が寄越したという話を、千冬は聞いていた。

「来ませんね。事前に連絡はしていたと思うんですが」
「ああ」

千冬は苛立ちを隠すことなく、隣にいるエマヌエーラの担当試験官である教員に話しかけた。

ISスーツに身を包んではいるが、着ているというよりも着られていたと言った印象の方が強い。どことなくズレたメガネが特徴の山田先生だ。この一年、千冬の担当するクラスの副担任を受け持って貰うことになっている。

しかしまあ本当に、待ち人は現れない。いつそ失格にしてやるうかとさえ考えたところに、ようやく待ち人が到着した。

「遅くなりました」
本当にもう待ちきれなくなって危うく入学試験取りやめにするところだったぞ、と皮肉をつぶやこうとして千冬は息を詰まらせた。

その人物は体にしっかりフィットする、いわゆるスクール水着に似たタイプではなく、ライダースーツのような極端に露出を押さえた漆黒のISスーツを身につけて登場した。

まず目を引くのは、この世のものとは思えない腰元まで伸ばされた豊かな金髪。映画の演出のように思えるきらきらとした粒を纏ったそれは神々しささえ感じさせた。

下に目を下ろせば、自分と同じ、いや隣の教官と張り合えるのでは

ないかというくらい豊かな胸部。その発育具合からみて千冬はそれが弟同い年の人間とは到底信じられなかった。そこから斜めに切り込みを入れたかと思わせる細い腰につながり、またそこから男性にとって魅力的に移るであろうこれまた豊かな曲線を描いた腰元と、体の半分以上は占めると思われる長いほっそりとした足へと帰結する。

見た目は、本当に人間なのかと疑いたくなる少女だ。有り体に言っ
てしまえば女神だとか天使だという言葉の方がしっくりくるな、と
試験に関係のない感想を胸中で漏らした。それと同時に本当にどこ
か人間離れた魅力の持ち主を送ってきた、と苦虫をかみつぶすほ
かなかった。明らかに今年入学することが決まっている千冬の弟、
織斑一夏を意識したイタリア政府の策だということが見え見えだっ
たからだ。機体のトリアルも、あわよくば織斑一夏を惚れ
させてイタリア国籍にしてしまおうという魂胆が、千冬には気に入
らない。

「一体いつまで待たせる気だったんだ？」

同姓の千冬をもってしても見惚けてしまうその容姿に当てられたせ
いか先ほど感じた苛立ちなど霧散していたのだが、あえて怒りを取
り繕った。警戒しておくに越したことはないし、そして何よりも弟
を魔の手から守らねばならないという思いもある。

これがイタリアではなく他のヨーロッパの国だったら、千冬はこれ
ほどまでに警戒せずに済んだのかもしれない。イタリアには、黒い
うわさが付きまといていて離れないからだ。そう、IS学園という
国というくくりから独立した箱庭にまで聞こえてくるほどに。

隣の教官は未だに現実復帰していなかった。口を野球ボールが一つ
丸々入ってしまいそうなほど開けている。溜めきれなかったつばは
そのまま口から零れ落ちて顎を伝い、ISスーツを汚している。だ
らしない教師の姿にこっそりと、千冬はため息。

少女はうつむいた。目はうかがえないが、少なくとも千冬にも感じ
られるほど誠意がこもっていた。そのまま腰を九十度に折って、頭

を下げた。

「申し訳ありませんでした。すべてこちらの不手際です」

言い訳はしなかった。てっきり七面倒な理屈をこねくり回すタイプだとばかり思っていた千冬は少女の評価を少し上方に修正した。まだ試験官は旅立っている。そのいまだに呆けて現実復帰の糸口さえ見せない姿を見て、千冬は少女を待つていたときの苛立ちがグツグツとまた沸騰を始めたことに気がついた。それと同時に一年間の教師と一緒にやかましい小娘たちを率いなければならんのか、と千冬は頭を抱えなくなった。

「本当に、申し訳ありませんでした」

頭を九十度下げている為、顔は伺えない。隣はまだ（ry）。いい加減千冬の堪忍袋の緒が切れた。どならないように注意しつつ、少しばかり怒気を込めた。

「いい加減にしてください」

「はわあ！」

力を込めて麻耶を揺ると、ようやく反応を示した。予想以上に千冬の声が怒気をはらんでいたのか、一度大きく飛び上がった奇声を大音量で放出した後、彼女は顔を一気に青ざめさせた。

「あわわわわ！ 私はなんと言うことを！」

「……話が進まないのだが。はあ、山田先生、しっかりしてください。あなた一応これから試験ですから……それから、モスカ。もう顔を上げて良い」

「そうですね。わかりました。ありがとうございます」

それだけいうとエリスは懐から黒のサングラスを取り出した。そのまま装着。その動作を行ってから自由に解き放たれていた金糸を首の真ん中あたりで束ねて見せた。

イメージが一気に変わった。天使から人間に落ちたような。墮落、というのが一番適切だろうか？ 墮天使、という印象は受けない。

ただの綺麗な人間に成り下がったか、と千冬は何故か落胆している内心に訝しがりながらそう考え、そのままその思考を打ち切った。

「山田先生。いい加減にしっかりしてください。一応あなたは試験官なんですよ？ その事実を、もう少しきちんと態度で示してもらいたいものです」

「はわあ！ 本当にごめんなさい！ ……でもモス力さんが本当にきれいだったから。しょうがないんです。モス力さんが悪いんです！」

「……山田先生。……はあっ」

駄目だこれは。千冬はこの場にいる試験官にまともな期待を抱くことをやめた。眉間に寄ったしわを伸ばす。……ちらりとぞいた教室で眉の皺を伸ばしている自身の姿を意図的に無視した。

「わかつているんですが、外の紫外線というのがつらくて。というか本当に病気になるそうです。医師によると、ですけど。色素薄いんです、私の瞳。一応挨拶くらいはきちんとしなければと思ってサングラスははずしていたのですが。やっぱり駄目でしょうか？」

「いや、かまわない。そういう事情ならば、仕方ないということの特例として認められるはずだ」

不安そうな色を宿して問いかけてくるエリスに、千冬はできるだけ柔らかな印象を与えるようにゆっくりと首を振った。

色素の濃い日本人にとっては全く問題にならない太陽からの紫外線だが、色素の薄い欧州系の人間には致命的である。下手に太陽を直視した場合、失明のおそれもある。無理強いするわけにもいかなかったというのもあるし、何より多少無理をしても相手に敬意を示そうとする殊勝な心意気が千冬の目に好意的に映った、という理由もある。自分が口添えすればまず間違いなく認められるだろう、と千冬はみている。誰かに害がある若でもないし、IS学園の制服はカスタム自由である。校則違反には当たらない。

未だに通常運行の体型に入らないポンコツ（目の前にいる人物と同格の扱いをするのもばからしいので既にもの扱い。もともとモス力に入っていた精神が逆の身体に入れ替わっているのではないか、と一瞬非現実的な想像さえ千冬はした）に慈悲のない手加減無用のア

イアンクローをお見舞い。めりめりと何かが輝入る音は、錯覚ということにした。

教師として、また審判としての務めを果たすために千冬は顔を引き締めて胸を反らした。……涙目になってブクブクと泡を吹いているものを片手に抱えながら。

「両者、ISを装着して前に。これより入学実技試験を開始する！」
「よろしくお願いいたしますMs織斑、いえ。こちらでは織斑先生でしたか？」

「ああ。山田先生！ とつとと準備をしてください！ 休憩している暇なんてありませんよ！」
手を放した瞬間、フラフラと何歩か地面をふらつき、顔面から地面に激突。夢から醒めたように立ち上がり、早急にISを装着しようとして何も無い地面でもう一度転んでいる麻耶の姿を見て、千冬は新学期というものに不安を覚えて仕方がなかった。出来るならばいっしょ嘘の時間が来てほしくない、というほどに願うほど。

「始め！」

掛け声とともに動き出したのは麻耶だ。そこに先ほどまでのとろくさい印象はかけらも見えない。千冬は麻耶が元日本代表候補であることを知っていたが、それでもその動きには目を見張るものがあった。……本当に元日本代表候補だったのか？ と疑っていた自分は完全に消えうせた。

洗練された、流れるような機動。無駄を省き効率的に攻撃するその姿からは気迫が漏れでている。わずかに相手に気配を悟らせるマイナス要因のそれをのぞけば、その動きは日本代表に比べても恥ずかしくない出来だ。

ばらけて発射されるライフルの照準がぶれないようにしっかりと握りながら、彼女は縦横無尽に空を翔る。それでいて弾丸はしっかりと相手に向かって纏まって放たれている。常に一定数ばら撒かれる

それらは決して間合いを詰めさせるところを許さない。近接攻撃のみの千冬と対決したならばきつと苦戦するに違いない。彼女の實力は入学試験に当てるには逸脱している。担当を間違えたと思えばいい。もしくは嫌がらせか。これは合格ラインを調節しなければいけないと思つてエマヌエーラを見た瞬間、千冬は言葉を失つた。

弾丸をよけていたのだ。しかも一度も掠るといつた被弾も全くすることなく。完璧に避けきつていたのだ。

ISといつてもエマヌエーラのもはこの学園に訓練機として常備されている第二世代のR・リヴァイヴだ。イタリア政府から彼女に授与された、第三世代型であるテンペスタ？ではない。性能の差は段違い。もし第三世代で普段から訓練していれば違和感を感じずにはいられない程の操作性の差に襲われているはずだ。それを全く感じさせない程彼女は完璧にR・リヴァイヴを乗りこなしている。

ただの第二世代の、はずなのだ。それなのに、迫りくる弾丸な嵐を、被弾することなくともなさげに回避している。全く同じ条件で元日本代表候補を相手にして、全く見劣りしていない。

「いや、違うな」

独りでに呟いた千冬の視界は、焦れて肉薄しようと仕掛けた麻耶にエマヌエーラが持つていた連装ショットガンを馬を嘶かせるように使用し、冷静に対処した。近距離での連射をまともに当ててきたことに焦つた麻耶は後退を決意。シールドエネルギーをガリガリと削られてながら間合いをまた離す。

「互角以上だな」

千冬にはそれがとてもおかしな光景に思えた。ただの専用機を扱っていないただの代表候補生が元日本代表候補生と渡り合っている。珍妙な光景と言えるだろうか？

千冬は無言で目を戦闘から話すことなく、考えにふける。

そもそもIS学園に来る生徒というのは数回ISを動かしたことがあるくらいに素養の高い素人か、国家プロジェクトによって幼少期

から英才教育の中でもまれてきたエリートに分類される人間のどちらかだ。素人なら兎も兎、鍛えられてきたエリートだってあんな動きはできない。英才教育を受けてきたエリートと言っても所詮素人よりうまくISが動かすことができるレベル程度の実力しか持っていない、と言うことはそれを毎年鍛え上げて実践で使えるレベルにまで仕上げるのが仕事の千冬には痛いほどわかっている。例外と言えば今現在IS学園最強の座に収まっているロシアの国家代表くらいだ。あれはどこかおかしい。というかそもそも国家代表候補生ではなく国家代表だ。正常の範疇に収まっていない。例外の中の例外と切り捨てた。

なぜエマヌエーラは麻耶の動きにも対応し切れているのだろうか？千冬の中で疑問が浮かび上がる。元々仕込まれていたのだろうか？だとすればおかしい。専用機で来るはずだ等々。

そんな千冬を傍目で見ながら、戦闘はさらに過激さを増していく。弾丸が吹き荒れ、高速で移動する物体に空気が泣き叫ぶ。時々麻耶から発射されるグレネードをエマヌエーラが連装ショットガンで迎え撃って、弾丸の雨をもってピンポイント迎撃。エマヌエーラまで到達することを許されなかったグレネードは途中で火花を散らすか、ふらふらと地表を目指して落下していく。その落下の衝撃さえも耐えきれなくなりグレネードは地表を見ることがもなく爆発、地面を鳴動させる事さえあった。

「はああああああ！」

地表近くに陣取っていた麻耶のすぐそばで、何発目かわからないグレネードが爆発して、爆風と衝撃、それに煙をもたらす。煙に覆われる形でエマヌエーラの視界からはずれた麻耶はこれを好機とって思い切ってアサルトライフルとグレネードを収納。代わりに接近専用のナイフを取り出してタイミングを計っていた。

仕掛けるか。状況を監督していた千冬が目が厳しさを増した。

ハイパーセンサーというものは三百六十度、全周囲カバーすることのできる優れものだ。優秀すぎる兵器はしかし、問題点も明確だっ

た。

たとえ周りが広く見えたとしても、死角からの襲撃に対応という弱点の克服は、結局出来ていない。

たとえ見えているとしても、見ていないからだ。

一見同じようなものに思えるかもしれないが、その中身は全く異なる。

例えば木を見ていたとして。人間は葉を一枚一枚きちんと認識しているだろうか？ いやきつと出来ていないに違いない。なぜならそれはただ視界に移っているだけという「見えている状態」であつて、きちんと細部に渡るまで認識して、違いが分かるほどに理解している「見ている状態」ではないからだ。もつというならば人の忠告を右から左に聞き流す聞こえている状態が「見えている状態」であつて、それを真摯に受け止めて理解を示しているのが「見ている状態」なのだ。

詰まるところの死角である。こればかりは機械が悪いのではない。それを扱う人間の方に欠陥がある。いや、そういう風に規定されているのだ。

その人間の死角を、麻耶は突こうとしているのだ。

どう対処するのか見物だ。千冬はその結末を見逃すところがないように、目を凝らす。

モニターに移る麻耶の腹部が明らかに大きく動いた。大きく呼吸をして落ち着けているのか。それともまさか力を込めているのか、という考えが浮かんだ千冬の思考を一切考慮せず、麻耶は動いた。

「はあああああ！」

R・リヴァイヴが誇るカタログスペックに近い数値を叩き出して、麻耶はエマヌエーラに突撃していく。亜音速に迫ろうという無駄を許さない鋭い軌道の描く麻耶に目もくれず、千冬はため息をこぼした。

「……なにをしているんだ。それでは奇襲の意味がないだろう。そもそも奇襲の意味が分かっているのか？」

鯨波。己が誇る力を最大限に發揮する為の気合いを注入したそれは、この場においては正しい選択ではなかった。せつかく隠れてやり過ぎしていたあの時間はいつたい何だったのだと麻耶に問いただすことを千冬は決めた。

「……………」
エマヌエーラは目を見開いた。鯨波に驚いたのか、大きく開いた目を維持したままその場を動かない。

まさかの有効だになるのか、この明らかに間違った戦法がまさかの。それぐらい対処できないのか、あれだけの機動を見せておいて。

そう考えた千冬は悪くない。現に硬直したままエマヌエーラは全く動かなければ、勢い任せに突っこんでくる麻耶のかざした対IS用ナイフは到達する寸前までできていた。ナイフの先がエマヌエーラのISに到達しようとしたその時。

エマヌエーラの口の端が、わずかに上がった。

「……………に？」

千冬は想像していた結果を裏切る事態に、うめき声を上げることしかできなかった。

ナイフの切っ先が触れることなく、勝手にエマヌエーラから離れていった。

「違う」

真っ直ぐ突き出した麻耶の腕にエマヌエーラの拳が突き刺さり、麻耶のナイフの軌道が変更されたのだ。

これがただのIS操縦者にできるだろうか？ これにとっさというだけ押しのような条件をたたきつけられて。千冬には残念ながら心当たりがない。自分でもあの動き狙ったタイミングでしてみるといわれても不可能であると結論付けた。

まずあげられるのがタイミング。少しでも早ければただの空振りに終わり、また遅ければそれは意味をなさず、そのままナイフの侵入を許してしまう。

それに付け加えられるのが痛打した場所と、その方法だ。手首、ぴったり。そして直進してくる対象の真下を潜つての裏拳のようにスナップを加えた平手打ち。それを瞬時にあわせる。これらの条件を持つてして、たとえ自分の全力を持つてしても無理だと判断した。エマ又エーラの両手は当然銃を支えるために使われている。

それらの条件を、たった一度きりの、ほんのわずかな時間のタイミングを逃さずクリアして見せたエマ又エーラは、素早く平手を放つた右手を連装ショットガンへと戻し立て続けに発砲。がら空き、無防備の麻耶のシールドエネルギーをさらに削つていく。

弾丸を受けてようやく奇襲の失敗を悟つた麻耶がナイフを捨てて緊急離脱。それを逃すまいとエマ又エーラは連装ショットガンから一発一発の威力に優れているアサルトカノンに持ちかえてさらに激しく攻め立てていく。

「やはり、ただ者ではないな」

千冬はまるで自分とは異なる、異次元のものを見ているかのような気分におそわれながらも観察を続ける。中に宿るのは驚愕と畏怖とそれから、高揚。

戦つてみたい。心の底から、千冬は願つた。許されるならば万全の状態で、あれと勝負をしてみたいと。IS搭乗者として引退したはずであるにも関わらず、だ。

それほどまでの技量、判断能力、そして戦闘における技の組立。すべてIS学園生としてのレベルを逸脱していた。

大型で弾速の遅い弾丸はまるで狙つたように、次々と麻耶の機体に吸い込まれて、シールドエネルギーにダメージを加える。もうあまり余裕がある量ではなくなってきた。これ以上もらい続けければ麻耶のエネルギーは切れるだろう。

そう予想した千冬は、画面から決して目を離さない。

痺れを切らしたのかももう余裕がないのを知つて勝負を賭けたのか、麻耶は持っているだけ武装を持って、瞬時加速。振り切れんばかりに加速して、今度こそ背後をとつた。武器が決めてやるとばかりに一

斉にうなり声を上げた。

「……試合終了」

一斉射撃による煙が晴れたところで千冬が宣言して、試験は無事終了した。

「私は聞いていませんよ！　こんなに強い子がくるなんて！」

その台詞は千冬が一番言いたかった。

一斉射撃時。エマ又エーラは両手持ちをやめ、アサルトカノンと連装ショットガンを両腕に装備。それを持ってして迫りくる弾丸の撃墜にあたった。

それだけならば、麻耶がこんな台詞を言うはずがない。千冬でさえも震撼させたのはそれらを巧みに扱いながら弾丸が薄いところを指して常に移動し、それでも差し迫ってくる追撃の手を両腕の得物で振り払って見せたのだ。結局機体に傷一つさえも負わずに。

IS学園始まって以来の快挙だろうと千冬がいうと、なぜかエマ又エーラは顔をしかめた。ちなみに戦闘終了とともにエマ又エーラはもう訓練機であるR・リヴァイヴから降りている。

「嫌そうだな」

「……注目されるのが苦手なんです。私はこの容姿なので」

どこか疲れたようにいうエマ又エーラ言葉には、自慢という印象は受けない。むしろ言い迷惑だといわんばかりの態度。それでも嫌みに移らないのはこの少女故だろうかなんて思考を千冬は打ち払う。

「おめでとう、とっておこう。君は今回で三人目の試験管撃墜者だ。その実力は誇ってもいいぞ」

「過度の自信は油断を生みます。勝って兜の緒を締めると言いますが、織斑先生の言葉ならばありがたく受け止めさせて貰います。ありがとうございます」

他人のことを珍しくほめた千冬にも、エマ又エーラの返答は実にあっさりしたものだった。毎年のように降ってくる学園生の中にはそれだけで気を失うものや鼻血を出したりする人間が多かったので、その反応は新鮮なものだった。

外国人らしくない、一昔前の典型的な日本人のような謙虚な精神だ。その思慮の隣で、難しげな顔をする人物がいた。もちろん、麻耶である。

「ううう。今度はきちんと頑張ったのに。織斑君のようなことになるっまいって気合いを入れて頭の中で何度もシミュレートしたのに。こんなのってこんなのってこんなの。私ってもう、いらないんじゃないですか？ …… 自信なくなりそうですよ……」

がっくりとひざを付きうなだれている。呪詛のように延々と吐き出される言葉を聞いてみると、先ほどの晴れ晴れとした気持ちが急激にさめていくのを千冬は感じた。

「まあ、条件がフェアじゃなかったですしね」

「どういうことだ？」

「……ええっと」

困ったようにエマヌエーラは言葉を詰まらせた。言って良いかどうか迷っているようにも見えた。

「発言を許可しよう」

「……はい」

千冬のゴーサインに、エマヌエーラが頷いた。

「元日本代表候補生、山田麻耶先生ですね？」

「……え？」

まどついていた負のオーラを一気に吹き飛ばし、麻耶が首を傾げた。

「何で知っているの？」

「当時のデータを回覧しましたから。ここの教員のデータ、全員分を可能な限り見て対策を立てて勝ってこいと国に言われましたので。だから情報が筒抜けで癖とかを分析してたんであんなにうまくいったのですよ、とエマヌエーラ。

果たして本当にそれだけのものだろうか、と千冬は疑念を抱いた。確かに、過去の映像を見て弱点の分析・対策は可能かもしれない。

だからといって本当にその通りにうまくいくかと言えば、答えは否だ。

実際問題、そんなに戦闘の分析は容易ではない。映像でみると現実で感じるのは大違いであるし、だいたいそれは過去の姿でしかない。戦っている最中の麻耶ではないのだ。それに付け加えて当日のコンディションの問題、対戦相手による条件等を加えれば条件の違いなど幾らでもでてくる。

それとも、過去の映像だけで対処できるほど麻耶の技量は低いと思っっているのか？

「怖い顔をなさらないください。泣きますよ？」

一度おどけて、エマヌエーラはサングラスに触れた。

「まあ始めに映像との違いを確認しましたよ。特に時折出る癖とかを念入りに。それで記憶と現実を両方併せて今回の対策として、挑んだんです。だから初めは一切攻撃せずに、観察に徹していたんです。納得してもらえました？」

「するしか、ないのだからな」

降参の意思表示に、千冬は両手を上げた。

エマヌエーラはかいてもいない汗を拭おうとタオルを取り出し、顔に当てていた。

「そして私はおいていかれるんですか。酷いですよ。私の話をしているのに、どうして全部織斑先生が話しちゃうんですか。ずるいですよ。私にだって汚名挽回のチャンスをくださいよう……」

「……汚名を挽回してどうするんですか山田先生。……まあ確かに、私は少し出しやばりすぎたか」

十分すぎるほどに、新入生の実力を確認した。仕事も終えたのでもうここにいる理由もない。立ち去ろうと左足を踏み出した時に、背後から問われた。

「織斑先生」

「何だ、モスカ？」

足を止めただけ。振り返りはしない。それだけで聞く体制に入る。

「今日はありがとうございました」

「礼を言うのはこちらの方だ。良いものを見せてもらった」

足の運びを再開。今度はもう声もかからない。

大量にたまった仕事を思い出して、千冬は額に手を当てた。

「山田先生に手伝ってもらおう」

「首尾はどうだ」

「万事抜かりなく」

「そうか。気を抜くなよ」

「ヤー」

それだけというと、通信は勝手に切れた。今日の疲れをいやすために私はベッドに身を投げた。

本当に、いろいろあった。

まさか入学式前に実技試験があるとは思っていなかった。本当に本国の方の機体の調整を適当に切り上げてよかつたと思う。あのまま作業を遅らせていたら、イタリア政府の頭の固いおじさま方が噴火したに違いない。……責められるのは私のせいではないはずなのに、本当に笑えない。

肉体的には、特に問題は見あたらない。当然だ。あんなことぐらいでいちいち疲れはてるほど怠けているわけじゃない。

問題は、精神的な方だ。

まさかいきなり織斑千冬に遭遇するとは夢にも思っていなかった。織斑千冬。言わずと知れた、IS操縦の先駆者にして最強の戦士。空を自由自在に飛び回り、二千発以上の核ミサイルを撃破。その後やってきた戦闘機等の旧世代の兵器を葬り去り、一躍有名になった白騎士の操縦者。世間時には白騎士の正体は不明ということになっているが、あれを操縦できるのはあの時点では織斑千冬でしか考えられない。（ISの開発者である篠ノ之東に近い人物で、なおかつ技量の高い人物は彼女以外に存在しない。イタリア政府はその確信に至る証拠を保持しているらしい）初代モンド・グロツソ優勝者であり、第二回大会も優勝まで勝ち進んだ。その後電撃的に引退した、

まさにIS界におけるカリスマ的存在。

そんな彼女の身内は、唯一男でISを操縦できる織斑一夏がいる。いずれにしても彼女は機嫌を決して損ねてはならない、最大重要人物だと口を酸っぱくして言われた。

彼女の機嫌を損ねれば恩を売りたい相手による一斉報復があるから理解しているに、納得してはいた。

だがしかし、まさかこんなに早く接触することになるとは夢にも思っていなかった。

おかしいところはなかったか？ 致命的な言葉を発したりはしなかったか？ 彼女を警戒させるような事はしなかったか？

思い返してみても、私はため息を付く羽目になった。

「もつと手を抜いて試験を受けるべきだった」

それを口にしながらも、筋肉を衰えさせないようトレーニングはやめない。半ば習慣のようになってしまっただが、やって別に困ることはないので放置。

まあでも、これでいいのかも知れない。後々提出されるデータ道理の成績を出さなければ疑われることは確実だ。下手に手の抜いてなぜあの時に実力を出さなかったのかと窺われるより、ある程度実力を出しておいて、後々納得させる方がいいに決まっている。そういうことにしておく。でないとな私の胃が悲鳴を上げる。ストレスの種が歩いてくるとか言う現実を、私は認めたくはない。

織斑千冬とのコンタクトには成功。引退しているためデータの摂取は不可。

最低限記入すべきことを書き込み、送信。

これから私、エマヌエーラ・モス力がすべき事は二つ。

まず専用機持ちで先に結果を出している英国所属の第三世代、蒼い雫について出来るだけ正確な記録を提出すること。

そして世界でただ一人ISを起動させる事が出来る織斑一夏に関するあらゆるデータをイタリア政府に送信すること。

ため息が出る。こう言うては何だけれども、本当に運がない。そし

て呪われている。

「だいたいどうやってBTの仕組みを解明しろっていうのよ。機密事項の固まりすぎて接触できるかさえ謎だし」

ほんとにもう嫌になる。とりあえずろくでもないことから頭を離すためにシャワーを浴びようとして、一つ大事なことを忘れているのに気が付いた。

「ああ、篠ノ之束が忌もうと、違った妹に注意せよ、だったかしら？」

かのIS製作者篠ノ之束が溺愛する、妹。現在のISランクは所詮Cでしかないが、あの天災（誤字に非ず）のことだ。どんなマジックを使ってきたとしても不思議ではない。妹と織斑千冬、そして織斑一夏にしか興味を示すところがない、人格破綻者。何を考えているのか、世界に無用な混乱をもたらした災厄。壊れている故に、その行動が読めないと上層部の人間が零していた。

「ホント、呪われているのかしら？」

第一話 戦闘とお休み（不遇な機体）（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたらご連絡ください。

第二話 主人公と空気（不遇な機体）（前書き）

今回はなんとというかもう……。言葉が出ませんね（^ー^；）
いつも以上（まだ二回ですが）にはっちやけてます
短いし！ 山田先生絶対キャラ違うし！ てか一夏なんかただのば
かに成り下がっている（笑）

もうなんというか、グダグダです。

読むときは覚悟してください。

…… ストック切れました。次回は更新遅くなるかもしれません。

…… そしてお前はいつ出るのだテンペスタ？……。

第二話 主人公と空気（不遇な機体）

織斑一夏の体調及びテンションは、右肩下がりに急降下していた。何故か、それは今の状態にあった。

「……キツイ。想像以上だ」

彼の周りには、女子。女子また女子。女ばかり。男は自分一人のみ。囲まれている。何故か頭の中で銃声まで聞こえ、辺りは火薬の匂いで満たされている気さえしてきた。気分は仲間の撤退に遅れ敵陣にただ一組歩朕と言わんばかりに取り残され孤立した一隊長。全員の生存は絶望的。

選択肢は降伏か？ それとも自滅覚悟の特攻か？ と混乱している一夏の頭上に、声が降ってきた。

「それではみなさん、一年間よろしくお願ひしますね」

ぜんぜん、全くもって宜しくなかった。だいたい、敵の中で宜しくやろうなんてどこか頭の中のねじが外れているような輩だ。そんな半ばあきらめたような一夏の空気を読んでいるのか教室内はまるで閑古鳥が鳴いているように静まり返っている。一夏の顔色は青からもうすぐ白になりそうだ。

幼い声（顔を上げて姿を確認している余裕がなく、実際の姿は分からない）は早くも混乱しているようだ。あわわわわ、なんて言っているのだから。……単に一夏の耳がおかしくなって幻聴を受信しているだけかも知れないが。とうとう最後の時がきたか、だがまだ覚悟が！ と脂汗の流して命乞いを始めようかと考えているときに、身体を揺さぶられた。地獄の使者でも来たのだろうか？

「……織斑君！」

「はいっ！」

そこでようやく一夏は状況を把握した。目の前には地獄からの使者が！ なんてことは勿論なく、代わりにすでに涙目になっている担任と思しき人の姿が。ずれたメガネの縁から、雫が垂れた。

まずい。本能的に危機を察知した一夏は机から立ち上がる。動転していたせいか、途中上手く立てずに椅子を転がす羽目になった。慌てて元に戻す。

「なんでしようか！」

「自己紹介、してくれませんか？　だめですか？　だめって言われたらどうすればいいか……ううう」

「わかりました、自己紹介ですね。やります、やらせてください！　直前の体調不良、そして突然の担任と思わしい人物の涙に一夏のテンションはかなりおかしくなっていた。

状況は戦場ほどではないが、危機的であることに変わりはない。ちらりととなりを確認。仲間だと思われる篠ノ之箒と目があった。

「……」

目があった直後、何も言わずに顔をそらされる。どうやら絶体絶命の幼なじみを見限って敵に投降した模様。後で覚えていると内心で今の事実を記録。

「俺が、織斑一夏だ！」

どうだ、といわんばかりに絶叫。手のひらを目の前の机にたたきつけ、宣言した。勢いあまりすぎていい音が出たのか、周囲にいる女子の何人かが飛び跳ねていた。手がジンジンと痺れている。

周りの反応は、と一夏は眼球のみを動かす。

早く続きをいえ、と言わんばかりの多数の視線が、一夏を貫いている。その中には先ほど驚いたものの姿もあった。状況、依然変わらず。

このままでは、敵に……！　混乱した一夏の思考回路は何か目の前の敵に一泡でも吹かせようと打開策を探る。頭の中の働きの一夏はとにかく縦横無尽に走り回る。検索結果、ゼロ。あきらめろ、と誰かが肩を叩いた気がした。……小さい一夏は泡を吹いて倒れている。

もうどうにでもなれ、と一夏は自棄になった。

「以上、文句あるか！」

「あるに決まっているだろ馬鹿者！」

ぐらん、と一夏の視界はぶれた。その直後、言葉にできないほどの痛みが頭に飛来した。ジワリと侵食してくる闇に抵抗するため、足に力を入れて何とか踏ん張る。

なにか起こったか状況を把握する前に、一夏にとって聞きなれた声が聞こえた。

「おまえは自分の自己紹介すらまともに行えないのか！」

「げえ、関羽！」

あれ一テンポずれてない、と思うまでなく再び衝撃。被弾箇所、再び頭部。脳細胞連合の兵隊、約一万が戦死したのを一夏は悟った。小さい一夏は泡を吹いたままどこかに転がっていき、見えなくなっ

た。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

一夏が痛みと脳細胞連合兵の殉職と小さい一夏の行方不明いう事実

に悲嘆している間の、頭上のやりとり。

あれさっきの一括とぜんぜん声が違う！

と口に出さずに叫んだ一夏は悪くない。

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと……。流石に給料泥棒だと言われたくないですし」

副担任。学級を受け持つ教師の補佐を行う人。

「えっ！ 副担任！ 担任じゃないの！」

「……。言いですよどうせ影薄いんですから。副担任の挨拶を聞いてもらえないほどの、教師ですから……。っ！ どうせ私なんて……。どうせ私なんて！」

「……織斑」

頭に三度、衝撃。今度は何かをぶつけられたのではなく、机にたたきつけられた。そして雑巾でふくようにこすり付けられる。

脳細胞連合兵、被害甚大。至急応援を望む！ いかん混乱が激しい、一夏は努めて頭を落ち着かせる。

そこでようやく、一万五千もの犠牲を発生させた張本人の顔を見た。黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身よく鍛えられているが決して過肉厚ではないボディライン。狼を思わせるつり上がった鋭い眼。該当人物、一。それも一夏がよく知っている、だ。信じられない。目の前の事実を否定する。

「諸君、私が織斑千冬だ」

織斑、千冬といった。決して間違いではない。この距離で聞き間違えをするほど、一夏の耳は悪くない。目の前の人物は決して三国志の英雄などではなかった。もうここまでくればこの人物は一夏の姉以外にあり得なかった。

千冬は胸に手を当てて、目をつぶっている。それが嫌みでもキメているのでもなく、自然とイメージと合っている。

「君たち新人を一年で使いものになる操縦者にするのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ないものは出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳まで鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな？」

途端に上がる、黄色い声。

「キヤ　　！　千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

とかなんとか。大歓声だな、と一夏。確かに風格、容姿、振る舞いどれをとっても並の人間ではかなわない、大物のカリスマ性を感じる。それに当てられたように、次々と声を上げる。

「あの千冬様にご指導いただけると嬉しいですよ！」

「私、千冬様のためなら死ねます！」

そんな歓声を前にしても、千冬は顔をほころばせたりはしない。逆にうつつとうしそくに手を顔に当てて鬱陶しそくにさえしている。

本当に鬱陶しいのだろう、小声でボヤいたのを一夏は聞き逃さなかった。

「……毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるもんだな。私のクラスにだけ集中させているのか？　……ふうつ。まったく、酷く嫌われて

いるようだな」

上層部に、とでも続きそうだったが、残念ながら一夏にはもう聞こえなかった。正確に言うならばそれを最後に女子がまたヒートアップした。なんと小言を聞き取っていたらしい。地獄耳恐ろしい迂闊なこと喋れないじゃないか、と少し一夏は憂鬱になった。

「きゃあああああつ！ お姉様、もつと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躑をして！」

クラスメイトは元気だなと一夏は現実逃避した。そう現実逃避しながらでも、最初の発言と三番目に発言した人物の顔を記憶して関わらないようにしようと決心した。

途端に、視界が揺れる。振り抜かれた千冬の手のひらが一夏を襲ったのだ。

「それで。本当に挨拶も満足に出来んのか、お前は？」

殉職数、二万。衛生兵、衛生兵はいないのかと考えがよぎったが、拳を鳴らしている千冬を前に冷水を浴びせられて沈黙した。少しだけ身体が震えたのは誰にもにらつれていないだろうか？ と少しだけそこが気がかりだった。

「いや、千冬姉、俺は」

頭が勝手に、いや強制的に机と接吻した。犠牲がまた増えた。

知ってる？ 一回頭を叩くと脳細胞が五千個死ぬんだよ？ と豆に目鼻口耳と尾を付けた生き物が発言する光景を見た。お前登場するのが遅いよ、何やってたんだよと受信した電波に毒づいた。

「織斑先生と呼べ」

「はい、織斑先生」

このやりとりのせいで千冬が一夏の姉だと言うことが露見したが、些細な問題だった。次の光景に比べれば。

「遅くなりました」

盛り上がっていたその場の空気が霧散して、聞こえてきたややハスキーボイス気味な声の持ち主に目を向けた。

「……なんじゃそりゃあ」

一夏にだらしなく口を開けさせたその存在は、はつきり言って異常だった。

まず目を引くのが、目元を覆い隠す黒のサングラス。縁が尖っていて顔に沿って曲線を描いているそれは、まず普通陽射しが強いときにしかお目に掛かれないアイテムだ。レンズが赤く発光しているのが何とも言えぬ雰囲気醸し出している。

二番手は、なんと言っても改造された袖元。肘元までばつさりと切れ込みが入られている。その切り込みからは青い紐がちらちらと伺える。

そしてなんと言っても、容姿である。目元は伺えないがそれ以外の部分をみればかなり整っている。金色の腰元まで伸びる髪は首筋の部分のひもに縛られながらも優雅さを強調するように彼女の動きにあわせて粒子を放出しながら揺れる。

すらりとした腹部と対称的に腰元は豊かで、その流れを継承しないすらりとした腰から下の足は裕に体躯の半分以上を占める。

そしてなにより目を引くのが、一夏と同年にはとうてい思えない胸元。制服で締め上げられてもなおその存在を主張するそれは、スタイルのよい一夏の姉を上回っていた。学校指定のリボンは伺えない。どうやら先ほどの青い紐の正体はこれらしい。

一夏は、ただただ見惚けた。あんな人どこの雑誌にもみないぞ？

一体どこに所属するモデルさんだ、としばし雑誌をみた記憶をたどっていた。

「遅いぞ、モスカ。次はグラウンド十週の罰則を与えるぞ？」

「承知いたしました。この度は遅くなって本当に申し訳ありませんでした」

「……。次起こさなければそれで良い。……織斑、いつまで惚けているつもりだ。まさかそのまま授業に臨む気ではあるまいな？」

その声に、一夏はようやく今入ってきた女生徒に見取れていたことに気がついた。

隣に視線を走らせてみると、箒と視線があつた。まるで親の敵を見ているような気迫十分のその視線を受けて、一夏の背中から冷や汗が流れた。

何か怒らせるようなことをしたか？ と考えてみても思い浮かばない。後で先ほど自分を見捨てた件についての糾弾を兼ねて聞いてみよう、というところでチャイム音。一夏は何とか物々しい箒の視線から逃れることが出来た。

「さあ、ハプニングはあつたかもしれないがSHRは終了だ。諸君等はいからISの基礎知識を半月で暗記、その後の実習で基本動作を半月で体に染み込ませる。いいか、いやよくなくても返事をしろ、私の言葉は絶対だと思つて返事をしろ」

暴君ここに極まりけり、となぜか古語的表現で思考していた一夏は無防備だつた。

どぐし、と何かが突き刺さつた。よりもよつて千冬の出席簿の角が火を噴いた。

血が付いていたのかどうかは、当事者のみが知る。

第二話 主人公と空気（不遇な機体）（後書き）

大変、お疲れ様でした。

誤字脱字矛盾等ありましたらお手数ですがご連絡ください。

第三話 ヒロイン？ と出番なし（不遇な機体）（前書き）

……。一週間以上です。

なんで更新しねえんだよ！ 不定期並みじゃねえか！ ていうかも
う止めたかと思った（笑） 等々意見はあると思いますが、とりあ
えず完成です^^；

……そしていつの間にか評価が上がっている……だと！

本文の方はまあ、期待しないで見てやってください。

第三話 ヒロイン？ と出番なし（不遇な機体）

私が遅刻という致命的な失態を犯したのは、当然ながらに訳がある。「うんうん、うまくやっているのかな？」

画面の奥で気味の悪い笑みをひたすら浮かべ続けるのは、サルヴァトーレ・シレアと名を語る科学者だ。

黒のスーツの上から白衣を身に着け、左手にはいつも試験官を装備している、緑髪持ち主。研究室にこもっている時間が長いためか不衛生が身についている。（スーツがくたびれていたり、白衣に油を吸っていたり、髪に常時フケや間から覗くシラミが付属していたり等々）

風貌から言って科学者。科学者なのだけれど残念ながらどんな失言をしようともまともという言葉は一切聞こえてきたりしない。狂気に取りつかれている、悪魔が乗り移っているなんて言われる。それが専門としているのは人体代替機械——つまり人本来の身体ではなく機械で代用して、より効率よく運用してしまおうという考えの元、日々研究という名の人体実験を繰り返す。犠牲になった数は数えきれない。毎日どこからか人間を調達し、そして不要になった肉塊を秘密裏に廃棄する。そんなにゴミにするならば初めからクローンを使用して効率を上げればいいと誰かが提案していたが、パターンが偏る・同じ人間を斬ってもつまらない・クローンは意外と高くつく・コピーは所詮人間にはならないという理由を突きつけて黙殺している。狂気なんて言葉では到底足りない程、私の観点を持ったとしてもあれはおかしい。そもそもが研究所に来た理由が人間を解体したいからとか、まともではない。……初めから期待していなかったがまあ当然ながら、とても人様の前で言えることではないので計画は永久凍結。実験はもうずいぶんと昔に中止となり、当時の研究員たちはそろって皆死刑という判決が下された……ということになっている。が、しかしながらというか残念ながらというか、未だにそれ

は存在している。なぜか？ 理由はいくつが存在するが、最も大きなのはISの登場だ。

日本で開発されたマルチフォームスーツ。

アラスカ条約で軍事利用は禁止されているのだが、そんなこと知ったことじゃない。各国ともスポーツスーツと建前を述べながら日々研究に明け暮れている。人体実験をあからさまにしていた当時のイタリアを痛烈に非難していたドイツだって、今じゃクローンによる試験官ベイビーを堂々と軍の小隊のトップに立てている。同じ穴のムジナ。おかしなものね。あれほど前は基本的人権に反している！ といって非難してたくせに。

ISはスポーツだと言い張る頭のお堅い人間にはわからないだろうが、事実ISほどの兵器は存在しない。何せ単機で核兵器を筆頭とする従来の兵器をあっさりと無力化して見せたのだ。ISの有用性は白騎士事件で皆知っている、と思いたい。

それ故に、兵器として使用された場合の被害は、計り知れない。ISのコアは開発者である篠ノ之束博士しか作れないと言うことだが、数として四百六十七個。これを多いと見るか少ないと見るかは個人の勝手だが、私はこれは異常以外のなにものでもないと考える。(これに関して某国家様が不自然なほどだんまりを決め込んでいるのもまことに興味深い。人体実験を秘密裏に進めているという話もある)

何せISのコアは世界各地に散らばっているのだ。四百六十七個とは言ったものの研究用に使用されているものは当然ながら戦力として当てにならないし、平和利用も同様。

するとどうなるか？ 薄い壁の抑止力の完成だ。三十機もISを強奪すればまず不味い作戦を立てない限り負けることはなく、世界征服が可能だろうと判断できる。

その危険性を考慮していないのか、それとも無視しているのか？

アメリカは動かない。二世代型ISを奪われたのに国家の威信が大事だと言い張って。イギリスは実験用の最新鋭の第三世代型ISを

奪取された。フランスは未だにイグニツションプランの波に乗り切れていない。欧米は抑止力という観点から見るとすでにその機能を果たせていない。ではIS開発国日本はどうか？　とえば日本は日本で押しつけられたISの管理　IS学園に生で下手に動けない。他の国もそこまで金のかかるISに開発費を割けていない。

これに危機感を覚えたイタリア政府は万が一のことを考えて、かねてから行っていた人体実験を裏で公然と始めた。

それはドイツのような生やさしいものではない。好素材を見つけては買いに走る。国家の波を問わずして。断れば略奪、誘拐、裏から手を回して家を破産させるなど悪徳三昧。必要ならばどんなに地位の高い重要人物だって無理やり引っ張ってくる。恨まれて当然、むしろ討伐隊が出てもおかしくないこの所業をしているにも関わらず、イタリア政府に詰め寄る馬鹿はいない。ISという最新兵器の浸透が最も著しいというのもあるが、それでもこうしてイタリアが堂々とした顔でいられるのは、成果を上げているためにほかならない。

ISの開発こそ遅れているものの、素体の素質を徹底的に高めることでその不利さをカバーし、簡単に壊れない屈強な兵隊を使って国防、ひいては世界防衛をはかる。

その第一人者ともいえる功績者が、目の前のこれだ。

「どうしたのかな？　君の周りでまさか問題があったのかい？」

「ある訳ないでしょ。それならとっくのとうに逃亡してるわ」

「それもそうだね」

つくつくと鍋が沸騰するような笑いで愉快さを示した。

「君には期待しているんだよ。生身での戦闘能力はもちろん、ISの操縦技術においてもあのブリュンヒルデにも劣らないと言われてるし、ね？」

「……。あなたに言われると寒気がするわね、その齒の浮くような腐ったセリフ」

「おお、これは手厳しい。して、本当に順調かい？」

「……」

私は答えない。答えるだけの必要性を見いだせない。

彼にとって会話とは一種の享樂なのだ。本当は全く持つて必要としない行為を、暇つぶしで行う。天才は狂人と紙一重だ、と誰かが言っていたけれど、私が見てきたのはどこか人として振り切れてしまっている人間ばかりだ。

人を切り込むのが大好きとかまともな感性はしていない。それにまともさを見出したなら、目の前の男の同類に他ならない。

「まあ、せいぜい上手くやってくれよ？　なんて言っただって君には期待しているからね？」

「それなら早くデータを取り付くして死んでくれるとありがたい、というべきね。率直に言ってくれた方が普通の人間が誤解しなくて済むのよ？」

「人間ね。君がいうかね、それを」

「あなたが言うセリフでもないわね」

「……。くつくつく。その通りだ」

くつくつ。まるで滑稽な芝居を見ているかのように、瞳に無邪気さと残酷さを兼ね備えて光らせている。

……人間、ね。

「それでは、これで。ああ後何とかしてテンペスタ？型は完成させてくれたまえ。あれは少しばかり、かじっているのね。それでは、モスカ大尉」

「ヤー」

それだけというと、役目を果たした通信が切れた。一応相手は中佐の位を持っている。一体政府はなにを考えているんだと問いたただいた気がしないでもないが、それは意味がない。使える人間を放置しておくのは損益だと答えるだけであろう。事実、人格が崩壊している点を除けば優秀なのだ。政府に逆らわない、研究成果を絶大に残している研究者。手放すわけがない。

今の時刻はもう予鈴の三十五前。だいぶ時間を使った。もちろんそ

れを考えてあれはしゃべっていたのだろうか。

私が寮に入るまで滞在しているホテルは、IS学園行きの交通機関も使って此処からおよそ三十分。遠すぎないかと言われるかもしれないが、学園に備えて準備をするのにはこの場所が適当だったのだ。今から出て、ぎりぎり間に合う時間。ただし、なにもハプニングがなければ、だけど。

歩いていると、まず好奇の視線にさらされる。私の容姿はとも目立つ。たとえ魅了の魔術がかかっていると冗談半分で言われる眼を隠して制服に身を包んでも。いや、制服のせいで注目度が上がっているのもあるのかもしれない。

IS学園。世界でただ一つのIS操縦者育成施設だ。それはエリート
の証拠でもある。その学園の制服を身につけると言うことは、すばらしい素養を持った人間と言う保証になる。当然男卑女尊のこの世界においては僻みの対象だ。くだらないことでやっかまれることこの上ない。

「姉ちゃん、ちょっと良いか？」

汚い黄色がかった金髪に鼻ピアス、白のような銀髪の胸のあいた服着用の二人組が声をかけてきた。絡まれた。まあ当然、聞かなかつた振りをして立ち去る。いちいち相手にするのも面倒だ。

「おいおい、無視かよ」

「何だよ、俺たちじゃお呼びでないって言うのかよ？」

いきなり喧嘩腰になったところで、対応を変えることはない。するだけカロリーと貴重な時間の浪費だ。そんな無駄をする意味はない。無視を決め込んで退散。

「ふざけんなよ。ちょっと可愛いからって調子に乗りやがって」

「やっちまおうぜ」

するとどうだろうか？ 後から後から人が集合してきて、私を囲い込むように陣系を整えた。ざっと五十人ほど。よくもまあ朝からこんなに人を集めたなあ、と不覚にも感心してしまった。

「へへっ、久しぶりの上玉じゃねえかこれ」

「良いなあこれ。処女のおいがする」

一人の特技だけが気を引いた。確かに私は処女である。よくもまあ当てたものだ。本当に素晴らしいわ！と褒めたくなった。嘘だけど。……このフリーズ、何故か少しだけ心をひかれた。ほんの少しだけ。

「いくぞこらあ！」

「たっぷり可愛がってやるよ！」

本当に、面倒な事態になった。あれが電話してこなければ、まず間違いない遭遇することはなかったんだろうと言うのは簡単に想像ついた。災厄か、なんて突っ込むだけ空しいだけね。

結局、カロリーと時間を食う無駄をすることになった。

処理には、五分もかからなかった。

それにしても、サルヴァトーレ。あの狂人が救世主というのは、本当に腹がよじれるほどにおかしい。狂人が世界を救うなんて、まともじゃない。世界も、人も。

結局この無駄な行為に時間を喰われたせいで、結局SHRには遅刻初日から堂々と遅刻したせいで、必要以上に注目を浴びる羽目になつてしまった。

私だけ少し遅れての自己紹介。少し織斑千冬の視線がきついように感じる。警戒されたかもしれない。いつそのこと注意を払うように警戒度をさらに上げておく。

「エマヌエーラ・モスカ。イタリア代表候補。愛称はエマよ。まあ一年間だけれども、宜しくしてくれると助かるかもしれないわ」

無難な、ただし印象に辛うじて残るほどの挨拶に止めておく。予想に反して、どよめき等の反応は起こらなかった。

これは私にとって想定外の事態だった。何せ代表候補生である。このクラスにはすでに入試主席の英国代表候補生、セシリア・オルコットがいるにも関わらずの入学だ。騒がれて最悪印象を非常に悪くするということも考えていたのだが。聞こえていなかったのかどうでもいいのか、どちらなのかは私にはわからない。だけれども必要

以上に目立たなかったのはある意味幸運だった。

ただ、誰もしゃべらないというのは正直何故なのだろうか？ こちらの制服はカスタム自由と聞いたし、瞳も完全に見えないようなサングラスをつけて防御済み。これといったおかしな格好ではない。ならば何かほかのことが原因なのだろうか、なんて私の思考を打ち切るように大歓声が上がった。もっとも私ははじめ暴動が起きたのかと思いきや身構えたのだが。

「きゃあああ！ ちょい悪お姉さま系クール美女！（金髪）」

「同い年とは思えない成熟度！ いやああぞくぞくしちゃうさせられちゃう犯される！」

「むしろ犯されたい！ 犯したい！ エマお姉さまって呼んで良いですか？ 良いですね？ 呼びますね？」

「千冬様、織斑君に続き三度の幸運！ ああ生まれてきて本当に良かった神様仏様本当にありがとございます！」

次々とあがる、黄色い声。なにやら不穏なことを叫んでいる人間も中には伺えた。……流石にこの注目のされ方は予想外だった。金髪をまとめてこなかったのが悪かったのか、いやそんなはずはないきちんとまとめてきたはずだなんてバカなことを考えてしまふくらいには私は混乱していた。

一度思考回路を冷やして、監視対象へと目を移す。

セシリア・オルコット。窓を見ながらも時々視線を織斑一夏の方へと走らせている。その視線には敵意のようなものさえ混じっているように私の目には映った。何も言われることがなかったのは、どうやら自己紹介を全く聞いていなかったらしい。後で一悶着ありそうな予感に、こっそりと吐息を大気中に放出。

篠ノ之箒も視線は織斑一夏の方へと注がれている。どうやら何か一心不乱に見つめているのが気に喰わないらしい。その視線にはセシリア・オルコットよりも濃密な殺意を感じ取れた。資料によるとどうやら彼女は織斑一夏の幼なじみであり、実に六年ぶりの再会らしい。だからどうしたと言いたくなかったが織斑一夏は天性の女たらし

らしい。彼女の部屋と同室だということは修羅場か、なんて生きるために全く持って必要でない知識が飛び出したきた。……何をしているのだろうと自己嫌悪に陥った。嘘だけど。……まずい、癖になりそう。少し自重する必要がありそうだ。

そして最重要監視対象、織斑一夏は脇目も周りの状況も省みず、ただただ一心に見ていた。私を。

「遅いぞ、モスカ。次はグラウンド十週の罰則を与えるぞ？」

織斑千冬が、私を睨むように見ていた。その視線には私以外への悪意も見えた。私に見取れている弟がにくいのだろうか？ それとも見とれさせている私が悪いのだろうか？ まあ、そんなことを言われても困るのだけれども。

「承知いたしました。この度は遅くなつて本当に申し訳ありませんでした」

ようようしく頭を下げ、誠意を示す。こういう小さな積み重ねが相手の心証に大きな印象を与えるというのは確認済みだ。織斑千冬的好感度を下げて良いことなど一つもない。

そんな殊勝に見える私の態度に満足したのか、はたまた諦めたのかため息をこぼして腰に当てていた手を下げた。

「……次起こさなければそれで良い。……織斑、いつまで惚けているつもりだ。まさかそのまま授業に臨む気ではあるまいな？」

ぎろり、と織斑千冬が弟をにらみつけることで、本人がようやく魅了の状態から解放された。バットステータスのせいで本人とは預かり知らぬところで確実に被害がかさんでいたが、私には関係がない。具体的には一番前の端っこの席に座っている監視対象とか。私はそれらを一切無視して無視してそのまま担任のありがたいお話の拝聴に戻る。

「さあ、ハプニングはあつたかもしれんがS H Rは終了だ。諸君等はいからISの基礎知識を半月で暗記、その後の実習で基本動作を半月で体に染み込ませる。いいか、いやよくなくても返事をしろ、私の言葉は絶対だと思つて返事をしろ」

暴君ここに極まりけり、とでも思考していたか、織斑一夏は無防備だった。そこに肉薄する物体、一。

その瞬間、先ほど下げた手とは反対側の手が火を噴いた。目にも留まらぬ早さでの、出席簿攻撃。しかも角。当然ながらに頭に突き刺さり、攻撃された本人は絶叫した。クラス的面々は皆それを必死になっってみないようにはしていた。

あれは想像上に痛そうだ。織斑一夏の頭から赤い液体がこぼれ落ち散るだけはある。

……ところで私のどうでもいい考察は、一体誰の役に立つのだろうか、なんて考えがふとよぎった。こんなにふざけた報告を、正式な報告書に書くわけにもいかないし、ね。

第三話 ヒロイン？ と出番なし（不遇な機体）（後書き）

お疲れ様でした。

誤字脱字矛盾点等ありましたら報告をお願いいたします。

第四話 ……らしきものと不遇な……（ここから先は滲んでいてよく見えない）

四話らしきものです。心して読んでください。

……いいですか、くれぐれも心してくださいよ？ 何せ内容が……。

第四話 ……らしきものと不遇な……（ここから先は滲んでいてよく見えない）

織斑一夏の目の前には、鬼がいた。

「ちよつと、良いか？」

疑問系には聞き取れない。疑問符がついているが明らかに命令口調だった。

箒が怒っている。何で、と一夏は思う。別に一夏が怒らせるようなことはしていない。何せ六年ぶりの再会で、今ようやく話せたのだ。それまでに特にこれといったやり取りはしていない。怒られる理由がなかった。まさか今まで声をかけなかったのがいけないのだろうか？ といつても自己紹介の時は接触を図ろうとしてそっぽを向かれたし……。

そこで一夏は思い出した。あの時にむざむざと幼馴染に見捨てられたことに。

脳細胞連合兵の件は忘れていないぞ、箒。おまえがあそこで目を逸らさなければあんなにも犠牲になることはなかったのに！

一夏は心中で涙を流しながら、箒に抗議しようと思いついて決意した。

一夏の方に怒られる理由がなくとも、少なくとも文句を言うくらい権利はあるはずだった。

ということを頭の片隅で考えながらも、出てきた返事はどもりながらのものだった。

「お、おう、いいぜえ？」

ここでヘタレというなかれ。彼だって好きでやっているわけではない。ただあまりにも幼馴染が恐ろしいので、強気な態度は隠しているのだ。俺には秘められた力が！ という青少年独特の自己保全をしている間に、箒は先に進んでいく。それを追いかけるようにして一夏は箒が歩いていく方向に追従していく。階段を上り、扉の先には開放的な空間、屋上にでた。

「何のようだよ」

どもりを抑えて、柔らかく聞こえるように口調を整えた。

その一夏の問いかけに、箒は手すりに身を預けたまま動こうとしない。一度伺った瞳の奥には小さな灯が点っていたように一夏は感じた。

来るか。一夏は身構えた。が、予想に反してしゃべらない。誘ってきたのはそつちだろ？ と呟きそうになるが勿論自重。鬼の前にむぎむぎ姿を現す馬鹿はいない。洗濯はいない間に、だ。

「六年ぶりなんだよ、少しくらい話があつたつて不思議じゃないだろ？ お互いに久しぶりなんだからさ」

「え、ああ。ん……」

促しても、とうとう口を割ろうとはしない。というか先ほどの鋭さが確実に薄れている。今ならば行ける。仕方なしという風を装って、一夏から話し始めることになった。

「去年の剣道の全国大会、優勝したんだつてな。おめでとう」

「なんでそんなこと知ってるんだ！」

「いや、新聞で読んだからなんだけど」

「何で新聞なんか読んでいるんだっ！」

会話の主導権を取ろうとした結果は、理不尽極まりない発言だった。はつきりとおまえなんか新聞読むんじゃねえ！ と宣告されたようなものだ。表現の自由は日本国憲法に保証されているんだ！ と鉢巻を頭に巻いて抗議したい気分には刈られた。……親友とキャラがかわぶるな、とあえなく一夏は断念したが。そうしておくことで箒の剣幕にビビったという事実が帳消しになるものだから、一夏としては安いものである。勿論親友のことは一切考慮にないのはお約束。

「あとは、まあ」

「何だ！」

という発言の後、箒が身を縮ませた。剣幕の鋭さに気がついて自重したらしい。興奮している理由は一夏にはわからないが、その口調を聞いていると妙に懐かしい気分にとらわれた。そう思うと鬼のように思えていた箒が急に同じ人間に見えてきた。じろりと睨まれた

ので余計なことを考えていたのがばれたのであろう。流石幼馴染。

一夏は失礼なところを考えていた自分を棚に上げて褒めた。

「久しぶり。六年ぶりだけど、箒ってすぐにわかったぞ」

「えっ……」

「いや、だって髪型一緒だし。気付かないわけがないだろう、大事な幼なじみなんだから。にしても、きれいになったよな、本当に」

「……っ！」

そうすると箒は顔を真っ赤にして、ポニーテールの髪を振り出した。

「これは、夢か？ 夢なのか？ だって、あの、一夏だぞ？ 朴念仁の？」

……なんて失礼なところを堂々と言っているのだろうか？ 朴念仁？

言われた奴はかわいそうだな、でもなんで俺の名前が直前に来た、とすっ呆ける一夏は全然気が付いていない。自分の悪口を堂々と目の前で言われていることに。

そうやって箒が狼狽している間に、休み時間の終わりを告げるチャイムが無上にも鳴った。あ、犠牲について追求してねえや、と思っただとところで後の祭りである。

未だに顔を染め上げて狼狽えている箒を促して、一夏は教室に戻った。

箒の中の一夏は一部美化されている部分があります。発言の食い違いはそういう風に解釈して下さい。

篠ノ之箒と織斑一夏は幼なじみである。出会いこそいい印象ではなかったが、そんな過去も箒にとっては良い思い出である。

初恋の相手（その当時はその感覚はなかった）であった一夏と離ればなれになったのは、姉である篠ノ之束のISの開発である。

誰がみても明らかかなその超兵器の存在を作り出した篠ノ之束を捕ま

えようと、ありとあらゆるところから魔の手が忍び寄った。それを回避するために、政府による定期的な転校を繰り返した。当然一定の場所に留まることはなく、まるで渡り鳥のように場所を転々として時を重ねた。友人なんてできるはずもなく、ただただ無為な日々を送っていた。

その原因になつた姉を、箒は酷く恨んだ。お前なんかいなければよかったのに、と。またその姉が作ったISという兵器もまた、疎んだ。

だがしかし、運命は彼女を決して逃がしたりはしない。篠ノ之東天才であるように、織斑千冬が卓越したIS操縦者であるように、彼女もまた運命には逆らえなかった。IS学園においての保護、実質的には政府による三年間の監禁である。仕方のないことだと、頭では理解している。しているのだけれども到底納得はできない。箒の立場は常に微妙な位置にあり、日本政府としてはなんと少しでも管理できる位置に居なければならぬのだ。篠ノ之東の身内として。だがそれは所詮政府の都合であり、篠ノ之箒という個人に配慮したものでは当然ない。不満などないはずがなかった。むしろ不満でないところを探すのが大変だった。

それでも、救いは確かに存在した。彼女の血統がそうであったように、彼もまた運命という歯車に組み込まれていた。世界で初めて、男のIS操縦者現る。

そのニュースを聞いたときには、政府に対する不満などどこかに吹き飛んでいた。ただただ感謝して、一夏と同じクラスになれるように日本政府に「お願い」をした。結果はごらんの通り。

要望が見事になつたことを知った彼女は少しでも一夏に思い出してほしくて、少しでもあの蜜月のような日々を思い出さたくて髪まで昔のスタイルに戻した。

そして、再会の時は現れた。だというのに。

「全く、よく分からん外国の女にうつつを抜かして。あのアホ面は全くみていられないぞ」

呻くように愚痴をこぼせば、また怒りの炎が再び燃え上がって箒の心を焼く。その痛みに気が付かないふりをして、尚も言葉を重ねる。「……少しくらい、私を見てくれたって良いじゃないか」

好きな異性が、ほかの女を見ているのは面白くない。自分だけを見ていてほしいと願う嫉妬心がじわりと箒の心に染み込んだ。一度染み付いたものはなかなか取れず、それどころかかえってほかの部分まで到達、汚染する。箒の心は酷く揺らいでいる。

「だいたいあいつはいつもそうだ。ほかの女のところにヒョイヒョイとくつついていくのだ。一体なんだというのだ。嫌がらせなのかな？ 嫌がらせなのだな。私が人間関係を気付くのが下手だと知っての狼藉か？ 外に出かけてはほかの女を連れて……」

一体全体いつの話をしているんだと突っ込んではいけない。そしてそれは六年も前の話では？ も同様である。それを口走るということは一夏や箒が変わっていない、という証拠でもあるのだ。

「……私じゃ、だめなのかな？」
思わず熱くなった目元に気がついた箒はいつものように目をつり上げてごまかすことにした。自分は泣いてなどいない、と。

そんな箒に、チャンスが訪れた。授業終了の鐘が鳴ったのだ。休み時間に突入したのだが、誰も一夏に話しかけようとはしない。みんな、様子見をしているのだと視線の一部を奔らせて確認するだけで悟って見せた。流石は一夏の幼なじみである。その能力は伊達ではない。……もつとも、その能力も肝心なところで生かしてはいないが。

箒は懲りずにメラメラと盛り上がる激情を制しながら、一夏に近づいた。

「ちよつと、良いかな？」

有無をいわせない強い口調で箒が問いかけると、一夏は少し狼狽えるように頷いた。

なるべき人のいないところが良い。教室は視線が集中しすぎる。そのまま箒は廊下に出る。ここで良いか、と思ったところで箒は周り

を確認。視線、視線、視線視線視線ととにかく至る所で目が光っている。どうやらこちらのことをかぎつけているらしい。何かある、と。

包囲網は徐々に完成しつつある。どこかにゆっくりと話が出来る場所はないか？ 箒は真剣に眼球を稼働させる。綻びを見つけた瞬間、箒はそこを強行突破に踏み切った。手が出ようが足が出ようとけが人が出ようと箒の知った話ではない。今は一夏と話すのが何よりも大事なのだ。その甲斐あってか、何とか女子の野次馬を退けることができた。

そのまま人のいないであろう、屋上へ。開放的なその場所に出て、箒は手すりに捕まった。

「何のようだよ」

口調は堅さが無い、記憶のままの一夏だった。成長したせいかな、声だけは低く変わっている。それでも響くことがないその声は、良い声だと箒は思った。

喋りたいことは、たくさんあった。それを声に出そうとしたが、声帯が上手く震えず声にならない。

結局、箒は手すりに身を預けたまま動けない。ちらりと確認した一夏の目は透き通っていて、あのころと全く変わらない純粹さを伺うことができた。

一夏は、口を開かない。箒は何か思いを音にしようと励むが、それらは声にならずに消えていってしまう。

一体何時までそうしていたのだろうか？ 数分か、数十分か。現実にはわずかな時間でも、箒にとってはとても長い時間だった。言いたいことがたくさんあるのに言うことができない。だけれども、胸に暖かい気持ちの流れてくる。そうしているだけで、箒は満足することができた。

お互いが離れてしまつて失った、欠けた時間の埋め合わせ。これくらいは良いだろう？ と自分にそう言い訳して。箒はその時間を堪能した。

言葉を交わさない、無言の至福の時。その時間は、しかし永遠には続かなかった。沈黙を、耐えきれなくなった一夏が破ったからだ。

「六年ぶりなんだよ、少しくらい話があったって不思議じゃないだろ？ お互いに久しぶりなんだからさ」

「え、ああ。ん……」

終わってしまった。暖かい気持ち、流れ出て消えていく。喪失感に思わず対抗するように、箒は自分の体を抱きしめた。暖かい気持ちの代わりに、寂寥が箒を包み込んだ。その痛ましい事実から逃れることができない箒は先ほどとは違う理由で、言葉を発せられなくなった。漏れ出たのは、音としてしか機能しない無機質な言葉でしかなかった。

暗鬱に支配されている箒に気がついていないのか、一夏はいつものように明るい口調で口元を動かした。

「去年の剣道の全国大会、優勝したんだってな。おめでとう」

何故？ その事実が耳に入り、脳に入ったその瞬間に暗鬱は吹き飛んで、箒の頭は驚愕と混乱に支配される。

全国大会。それは思い出したくもない、過去の醜い自分だった。自分の持つている力に溺れ、日頃から溜まっていた鬱憤を晴らすようにしてただただ持てるだけの力を相手にぶつけて勝ち取った、何の意味もない勲章。そこで得た物は空虚さと賞状と、そして自分の醜い姿だった。試合後自分のその姿を知って嫌悪し、そして自ら嘲笑った。

これのどこが篠ノ之束と違うというのだろうか？

他人を顧みず、自らの都合だけを周囲にふりまき他人を巻き込み感染させる。まさにそれは天災そのもの。似ているところの話ではない。まるで自分の姿に姉を見ているような感覚にとらわれて、暫くの間真夜中一人寝台で自身を責め続けた。

知られたくない。醜い姿を一夏には知ってほしくない！ その感情があふれだして鋭い棘となり、柔らかい幼馴染へと突き刺さる。口調は強さを帯びて、ひどく尖った。

「なんでそんなこと知ってるんだ！」

「何で新聞なんか読んでいるんだっ！」

理不尽極まりない発言だ、そう箒自身はつきりと自覚している。それでも叫ぶのは、醜い自分を一夏が知ってしまうという恐怖心と、その課程で起こりうるかもしれない今まで箒にとってきた態度の変更をなによりも恐れた結果だった。せつかくこうして紆余曲折あつたにしろ、再会できたのだ。やっと、やっとの思いでつかみとったクラスメートという立ち位置。幼なじみという特権。これ以上、なにを望むというのか？ 箒は自分自身に問いただす。

箒が自身の内面を見つめている間にも、状況は刻一刻と変わっていた。一夏が言いにくそうに、声を呑んだ。

「あとは、まあ」

「何だ！」

現実世界と自分の世界を行き来していた箒は、突然詰まった一夏に對したて張り上げたような声を上げてしまう。すぐに、箒は身を縮ませた。剣幕が、あまりにも鋭かった。精神的に不安定になっていて、興奮したり落ち込んだりを繰り返している。こんな体たらくではいけないと、箒は自分を一括して、表情を引き締めると同時に心構えもしておいた。こう言うときに限って、箒の幼なじみの言葉は的確に相手突き刺すと長いつきあいでも十分すぎるほど分かっていた。

「久しぶり。六年ぶりだけど、箒ってすぐにわかったぞ」

「えっ……」

ほらみる、やはりそうなったじゃないか。そう苦言を受けたような態度をしているが、心はだんだんと満たされていく。ああ、この時間が永遠に続けばいいのになどという普段の箒からは想像もつかない言葉だつて、簡単に内心に漏らしてしまえるのだ。

そんな箒の満足感は、そう長くは続かなかつた。言い換えるならば、その程度の満足感は次の一夏の言葉によって簡単に振り払われた。

「いや、だって髪型一緒だし。気付かないわけがないだろう、大事

な幼なじみなんだから。にしても、きれいになったよな、本当に」
「……っ！」

なんだ、これは？ 箒は顔から、まるで火が出るような錯覚にとらわれた。顔が熱い、心臓がうるさい、きゅうと心がそれまでの満足感を振り切った充実感を覚え、今までは比べ物にならないほど満たされる。世界すべてが包み込んでくれている。世界はこんなにも優しく、暖かい物だったのかと箒は初めて知った。

これは本当に、現実か？

その一方で、箒の頭の片隅には警告ランプが絶え間なく点灯し、サイレンが鳴り響いている。

こんな都合のいい現実があるものか、と。今まで何人もお女をたらし込んできたのだ、一夏は。（箒が知らないだけで、一夏の撃墜スコアは箒の知っている数よりも数倍多い）こんなことがあるか？ いやあるわけがない！ とそこで現実に戻ってきた。

「これは、夢か？ 夢なのか？ だって、あの、一夏だぞ？ 朴念仁の？」

「おい、遅れるぞ？」

そんな混乱した中でも、箒は一夏の制服腰元の布をしっかりとつかんだ。

瞬間心が軽くなって、どこまでも飛んで行ける。背中に羽が生えたような錯覚に支配される。

顔がゆるんでいる。自身でもしっかりと自覚するほどにそれは分かりやすいものだったが、止めるとこは出来ない。止めようとしたところで再び顔がゆるみ始めるのだ。

楽園。一度覚えたら何があってもすがりつきたくなくなる、禁断の場所。もう味はしめてしまった。後戻りなどできるはずがない。この温もりを離すことを選択にかけられたならば、箒は迷いなく身を投げ出すであろう。それほどの決意、思いを背負って。

二度と離れませんように。箒は願った。

「どっした？」

「何でもない」

少しでも長くこの世界が続けますようにという意味も込めて。

第四話 ……らしきものと不遇な……（ここから先は滲んでいてよく見えない）

本当にお疲れ様でした。

何かありましたら作者まで。

第五話 操縦者まで扱いが不遇になってきた今日のこの頃と

(何かで消さ

何とか今度は一週間以内！

長いので前半と後半で分けたんですがその結果が……。

なので中途半端なところで終わってますが^^；

そして今更ながらに他作者様に比べて「文字数と評価」を比で表すと大敗していることに気がつく…… (遅い)

内容がゲテモノ、人を選ぶということもあるんでしょうけど。

読みにくいんですかね？ 空欄がほとんどないですから。よく分かるんです、空欄の上手い開け方とか。

何かあればぜひ書き込みを。面倒でしょうけど^^；

長々と失礼しました。それではどうぞ。

分からない。織斑一夏は天を仰いだ。

なんだこれは？ アクティブなんちゃらやら広域うんたら。全く持つて聞き覚えのない単語が、無言で一夏をチクチクと責めてくる。思わずいじめか何かと勘違いしそうなそれらをなんとか解説しようと頭をフル回転で働かせるも、全くの徒労に終わった。マンガだったら水蒸気かはてなが飛んでいそうなほど、副担任の麻耶が説明しているそれらは難解な物だった。

どうする？ 一夏は己に問いかける。このまま分からないままではまずい。別にエリートになりたいとかそういう思考回路は持ち合わせていないが、授業についていけないと言うのは致命的である。高校は義務教育ではないから補講の嵐だ。……留年があるかどうかは定かではない。下手をすると最後には休みなく延々と授業を受けさせられるなんてことにもなるのかもしれない。自由？ そんな言葉は多分吹き飛ばされることは簡単に予想できた。……何故かいる鬼教官のせいだ。

周りを見ても誰もが真面目に受けている。苦戦している様子は見受けられない。そこで一夏は事前予習をしてきている、という話を思い出した。なんかの間違いだと鼻で笑っていたが、もしかしたら事実かもしれない一夏は今更ながらにその事実に至った。

「織斑君、何か分からないところはありませんか？」

周りのきよろきよろし過ぎたためか、麻耶がわざわざ教壇から降りてきた。

「あ、えっと……」

教壇から降りてきた、ということとはよほど集中力を欠いていたのだろう。慌てて一夏は教科書に目を移す。だが現実是非常なもので、先ほどと同じくその内容は全く解読できない。海外の古代文字を見せられているような、そんな気分陥った。

「分からないところがあつたら、遠慮なく聞いてくださいね？ 何せ私は先生ですから」

先生、のところで一瞬影のエフェクトが見えたような気がしたが一夏は気にしないことにした。えっへんとでも言いたげに、山田麻耶胸を反らしている。

聞くか？ 今聞いておけばまだ助かるかもしれない。そんな邪な考えが一夏にをよぎった。

「先生！」

「ひっ！ ははははい織斑君っ！」

机を叩いて凄みすぎた結果は、五千の犠牲。今日だけで女王様による虐殺ショーでも行われているかのような被害だ。女王様っていうのなんか似合うかもしれない、などというのは頭の片隅に追いやる。これ以上むだな犠牲は必要ないのだ。

痛む頭を押さえて、一夏は呻いた。

「……………ほとんど全部、分かりません……………」

……………。教室内の空気が凍った。少なくとも夏にはそのように感じられた。

誰も彼も発言しない。頼りの麻耶までフリーズしてしまっていて、教室内はまるで葬式のような静けさだ。

「……………全部……………全部……………あはははは」

若干壊れてしまったような麻耶に、次の瞬間にはきつい目覚ましが入った。端から見ているだけでも、かなり痛そうな一撃がたたき込まれた。

「授業中です山田先生。勝手に寝ないでください」

「……………ばい……………すみません」

麻耶は一夏と同じように頭をさすっている。眼鏡の奥に雫が確認できたが、それを一夏は見なかったことに。見た目ほどの威力はやり確保されていたらしい。流石千冬姉教師相手でも一切手加減なしだ、などと一夏は感心していた。

「え、えっと……………織斑君以外で、今の段階で分からないと言う人は、

どのくらいいますか？」

誰も手を挙げようとしない。そのまま全員、沈黙を保ち続けている。やっぱりか。でもおかしくないか、なんでみんなみんなこんな訳の分からない話についていけるんだ？ という一夏の思考は、姉によつて妨害された。

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

入学前の、参考書？ そんな物は家に在住していなかったはず。新学期に向けての準備は結構入念にこなした。家の中は見えていないところがないほど漁っていたのだが、そんなものは何一つとして確認できなかった。

そこで一夏は思い出す。入学前のある日に、古紙回収日があったのを。そこで古い電話帳を捨てたのだが、なぜかそこに二冊あったのだ、電話帳が。おかしいなと思いつつも、一夏はそのまま回収させてしまった。おかげでトイレトペーパーの数が増えたと喜んでいたのである。

「古い電話帳と間違えて捨てたんだと思います、たぶ」

言い切る前に風を切る音を従えて、出席簿が飛来、即座に着陸。被害、主に一夏の頭皮及び脳細胞。

「必読と書いてあったら、お前は字も読めないのか？」

どんどん、犠牲が増えていく。埋葬する数がこのペースを維持して増えていったら兵隊の亡骸を埋める墓地がなくなりそうだった。葬儀屋の高笑いが聞こえてきた。葬儀屋だけが一人勝ちじゃないかと世の中の不条理を嘆いた。

「後で再発行してやるから、一週間で記憶しろ」

「い、いやあ……。一週間じゃあの分厚さは攻略できないんじゃないかと思つたのですか？」

鋭い眼光が、一夏にたたきつけられた。心なしか、黒目が光っているようにも見えた。人を殺せるのではないかというその眼光に当てられては二の次を告げられるはずもない。一夏は沈黙した。

「その必要はありません」

無条件降伏しそうになっていた一夏の元に、救済の手がさしのべられた。それがいくら第二次世界大戦時に先に無条件降伏して同盟から脱退したイタリアであつても関係なかった。この葬式のようにどんよりとした空気を払拭してくれることが、なによりもうれしかった。

「どうしたモス力？」

「入学資料は私が持参しています。もう必要のない物ですので織斑君に譲りたいと思います」

頻枷の声というのだろうか？ 少し前にも聞いた、心をつかんで離さない特徴的な声に、一夏は思わず振り返った。

エマヌエーラ・モス力。彼女はそういつていたはずだ。

その彼女は今、片手では抱えきれないほどの分厚い本を抱えて、こちらに接近してきている。

一夏の喉は、からからに乾いていた。

「これを」

「？ ……ああ、ありがとう……？」

それだけ言うと、彼女はすぐにきびすを返した。一体何だったのだろうと思っていると、急に耳になま暖かい風が吹いた。

「わからないところあれば、聞きにきて。1027にいるから」

「あ、ああ」

「それと」

耳元で囁かれた、一夏の心臓はひとりではねた。モス力と呼ばれた少女は面白いものを見た、とでも言うように妖艶にほほえんで見せた。

「私は男が嫌いな。それだけは頭に止めておいて頂戴」

本当にそれを言い切ると、彼女は自分の席へ戻って行ってしまった。本当にいつたい何だったんだ？ と再度一夏が自問していると。

「本当におまえはなにも学ばないのだな。授業中だといっておいたはずだが？ 後その参考書は覚えておくように」

「……はいすいません。わかりました」

頭をさすりながら、一夏は何気なく隣を見た。

「……」

なにも見なかったことにした。それは隣に鬼がいたとか、なんかすごく怒っているとか、そしてすごく睨まれていたからとかいう理由ではない。一夏はなにも見ていないのだから。

結局授業はわからないので一夏はメモを取りながら、エマ又エーラが渡してくれた参考書を読んでその授業の時間を過ごした。

「ちょっと、よろしくて？」

「非常によくありません。マジで余裕ないです」

二時間目の休み時間、授業時間からエマにもらった参考書と格闘を続けていた一夏は掛けられた声を無視しようとした。

声の主など確認している暇などないのだ。今は少しでも授業に追いつけるようにしなければならぬし、なによりもこの参考書、全くの素人である一夏にも分かりやすくかかれていたのだ。

正確には参考書がわかりやすいのではなく、難解な説明は横の空白、足りなければ白紙の紙を用意して付け足された注釈が非常に解読しやすくできている。基本的には文字、時々プロかと思わせるような図や絵といった注釈入りのそれらは内容を理解するのにも手間どらせないように簡潔に、されど飽きないように刺激成分も加えながらついている。本当にこの内容を覚えれば授業について行くことができるかと確信した一夏は、わき目も振らずにただ一心に参考書を読みふけっている。エマ様様である。

「ちょっと、あなたよろしくて！」

またもや妨害が入った。これ以上無視してめんどくさい事態になるのはごめんなので、一夏は嫌々顔を上げる。半眼で睨むようになってしまっても仕方がない。本当にいやいや顔を上げたのだから。

話しかけてきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女子だ。白人特有の透き通ったブルーの瞳が、ややつり上がった状態で一夏を見ていた。

その自慢の金髪はくるくると縦にロールがかかっている。良いところの出なのだろうか、その背後にはなにやら高貴なオーラのような物を放っていた。腕を組んで胸を反らしているところをみると「いかにも」現代の女子という出で立ちだった。一瞬瞳が不安に揺れたように見えたのは、一夏の見間違いだったのか。

昨今の世の中では、ISのせいで急激に女性の立場が上がっていた。なんと女性「偉い」という謎の等式が成立するほどの構造になり果てている。男とは単に奴隷・もしくは女性がしない労働力を提供する「道具」といった差別さえ受けることがある。一夏も町を歩いていると時々、荷物を差し出して無言で持てといわれることがある。もちろん全部丁寧にお断りしているのだが。

外人ね、と一夏は顔を目の前の生徒から離すように後ろを振り向く。同じ金髪ながら、誇ることなくつまらなそうに頬杖をついているエマと比較するのまばかばかしくなるほど、目の前の生徒は今の女性だった。

「聞いていますの？ お返事は？」

「ああもう聞いているよ。耳付いていないわけじゃないんだから聞こえているだろう」

暗に手で追いつく動作を臭わせる。そうすると目の前の女子は一夏の態度に憤慨するように声を荒げた。

「まあ！ 何ですの！ よくもまあそんなお返事で返せますわね！ 私に声をかけられただけでも貴方の身に余る光栄なのですから。」

それ相応の態度という物があるでしょう？」

めんどくさいと内心で愚痴る。一夏は正直、こういう人間が苦手だった。（好きな人間がいるようには思えないが）ISが使える、国の防衛を担っている重要人物であって偉い、という事実を盾に権力を振りかざし、我が物顔で胸を張る。

確かに、それは紛れもない事実だ。だからといってすべてがIS操縦者で成り立っているかというところではない。そこにはISを整備する人、それを設計する人、その素材を持つてくる人とIS関連

だけで仕事は多岐にわたる。それをまるですべて自分の手柄として偉ぶるその姿が、一夏は特に気に入らなかつた。ISを操縦できるというだけだけでは力があるだけのただの人だ。一夏はそう考えている。それがまた本当の国家代表になれば話は変わるのだが。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

実際問題、一夏はその人物を記憶していない。なんか自己紹介の時にやかましくしていたような気もしたが、頭の記録には少しも残っていないなかつた。千冬が担任だったこと、幼なじみに冷たい態度（頼った時に無視された）を取られたこととなによりも、エマの登場の方がインパクトが強かつた。

正直に答えた一夏の態度は、その名も知らぬ女生徒には気に喰わない物だつたらしい。吊り目をさらに細めて憤慨と嘲笑が混じった態度で見下ろしていた。

「私を知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を？」

名前はセシリア・オルコットだということが判明した。それ自体は特に感慨をもたらさない。せいぜいふんくらいだ。

ちらつと掠めた疑問を聞くために、一夏はセシリアに問いかけた。勿論その事項を参考書で調べる片手間だが。

「ちよつといいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の役目ですわ。よろしくてよ？」

「じゃあ遠慮なく。代表候補生つて何だ？」

どっかで見ただけどなあ、とページのめくる一夏のそばで、何人かの女生徒が倒れた。中には目を回しているものさえいたが、一夏は気が付かずに知識をため込みながら読みふける。当然、セシリアの方など見ていない。

「あ、あ、あ……」

壊れたテーブルコーダーだ、なんて前時代的な物体で例えてみせた一夏に、これでもかというくらい罵声が発せられた。

「あなた本気でおっしゃってますの!」

「うるさいなあ。どっかで見ただけで、思い出せなくてな」

参考書から目を離れた一夏の視界には、怒りのメーターがカンストしたのか、溢れだして冷静な状態になっているセシリアが見えた。こめかみを押さえて、わざとらしくため息を付いている。

「信じられません、信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビもないのかしら、いやそもそも常識という言葉は存在しているのかしら……」
それ以降ぶつぶつと独りでにセシリアはつぶやいている。少なくとも極東というのは正確だが、テレビがないはずはない。少なくとも1953年にはテレビの本放送が開始されている。馬鹿にするにも程があるだろうと一夏は呆れた。そして常識を知らないのなら言葉は通じないだろう。そしてISを開発したのは日本人の篠ノ之束だ。ご自慢のISを貶してどうするんだと、本当に言葉が出なくなつた。それと同時に、口で言うほど素養がないことが判明した。IS学園は日本であるのだから当然日本人は多い。それにもかかわらずきちんとした知識を入れてこないということは問題なはずだ。少なくとも目の前のセシリアにはそれに気が付いている節はない。

「で、代表候補生って?」

言ってから、一夏はある一つの仮定を導き出した。国家代表。つまりところの国を背負ってISに乗る文字通り国の顔。そして候補生。国家代表になれるかもしれない候補の学生、という等式。そこでようやく、なぜ見たことがあつた気がしたのかを理解した。はじめの方にメモされていたのだ。国家IS操縦者とはその国の象徴であり、武力であり、そして抑止力でもある、と。エマにはほんと感謝しなきゃな、と一夏は心の中でとりあえず礼を述べておいた。

「国家代表「IS操縦者の候補の学生として選出される、ようはエリートだろう?」……分かってるんじゃないやありませんの」

「まあ、思い出したただけ。だから聞いたことあつたかもって言うてたろ?」

一瞬毒気を抜かれたような表情になったセシリアだったが、鼻を鳴らして先ほどの勢いを取り戻した。

「そう！ エリートなのですわ！」

復活が早いなと思わなくもなかったが、それを指摘すると面倒なことになるのは明白だった。遠くで火事が起こっているならばわざわざ飛び込む必要はない。そういうことは専門家がやるものだ、関係ないなと無視を決め込んで、一夏は相棒となりつつある参考書に視線を落とした。

「本来ならばわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくするだけでも奇跡……幸運なの。その現実をもう少し理解していただけかしら？」

ああもうこの女めんどくさいな、勉強のじゃまするなよと苛立ちつつ、一夏は適当に調子を合わせることにした。無視してもいいのだが、流石に話しかけられているのにそれを蔑ろにするというその行為は人間としてどうかとも思ったというのもあった。周りで様子を窺っている生徒もいる。それらの評価を損なうようにすれば、確実に三年間がなくなる。面倒なりに一夏は対応した。最も、一夏のとった態度もあまり無視と変わらなかったが。

「おおそうか、それはラッキーだ。俺はツイている。やったぜー」

「馬鹿にしていますの？」

おまえが言えつつんだんだろこのアマア！ と激情を押し殺して、一夏は参考書の文字を追う。しかし先ほどから全く進んでいなかった。

セシリアの加熱は止まらない。お湯が沸くんじゃないかという熱を持って続ける。

「大体、あなたISについてなにも知らないくせに、よくこの学園には入れましたわね。唯一男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思いましたが、期待はずれですわね」

「俺に、何かを、期待、されても、困るんだが……！」

拳をぶるぶると振るわせて、それでもなお一夏は耐え続ける。箒が一夏の救援に走ろうと席を立ち上がった。

セシリアはそんな二人の様子に見向きもせず、ぺらぺらと口を回す。「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ？」

「……」

もう駄目だこの女、何を言っても聞きやしない。いつそのことぶっ飛ばしてしまうか？ という一夏の元に、朗報が届いた。その近くでは箒が密かに木刀を取り出し、いつでも飛びかかれるような体勢でいる。目が吊り上っているのはご愛嬌。

「ISのことで分らないことがあれば、まあ……泣いて頼まれれば教えて差し上げるのも吝かではなくってよ？ 何せわたくし、下々のものにも優しい貴族ですし。それに、試験で唯一！ そう唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一のところがやたらと強調されている。しかし残念ながらそれは誤りである。正確にはあと二人ほど、教官を倒している。織斑一夏の場合は教官を倒したと言うよりも教官（山田麻耶）が自滅しただけであり、さらにはエマヌエーラに至っては倒したと言うよりも蹂躪したという方が正しい（担当教官・山田麻耶）ので、「唯一」まともに教官を倒したということでは伝えられている。

そう、唯一”倒した”である。ようは受け取り方の違い。それ故に、このような悲劇が発生した。

一杯喰らわせてやる、と鬱憤をためていた一夏は意地悪く、ニヤリと笑った。ちなみに箒は戦闘準備万端で席に着いており、エマに至っては相変わらず我関せずといった姿勢を崩さずに窓の外を眺めている。

「入試って、あれだよな？ ISを動かして担当教員と戦う奴だろ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

品性を疑うような視線が、一夏を嘗め回す。しかし、一夏は屈しな

い。これから決定的事実を突きつけるのに、臆する必要など全く感じられなかった。

「ふっ。俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

セシリアが、今こいつなんて言った？ という表情でフリーズしている。その間抜け面をしげしげと眺めて、一夏は征服感に浸る。（箒は席に着いたまま素振りを開始した）

まあ実のところ、突っ込んできた教官を回避したところ教官はそのまま止まらずに壁に激突。まだ動きそうだったので一夏はそれに近づいてとりあえず審判が止めるまで殴り続けてシールドエネルギーをゼロにしたという何とも鬼畜さが垣間見える内容だったのだが。相当にシヨックを受けたのか、間抜け面から回復した後もセシリアはふらふらとしている。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチだったりしてな」

してやつたり、と一夏は幼なじみに指を突き立てたところ、箒は目をパチリと大きく瞬きをしていた。論破するのが珍しかったのか、とずっとぼけた感想を一夏は抱いた。（腕に抱いていた得物は見えていない）

「あ、あ……」

何かがひび割れる音を、一夏は聞いた。（その背後で箒が木刀をいそいそと収納していた）

「あなたも教官を倒してつておっしゃるの!」

「まあ知らんけど、そうじゃないのか？」

「はつきりおっしゃいなさいな!」

「まあまあ、落ち着けよ」

勝った! とよく分らない満足感に浸りながら、一夏はセシリアの鎮静化をはかる。一夏が横を向くと、箒がよくやったという視線を送ってきていた。勝利のVサインを献上したところ、どこからかため息が漏れてきた。

「う、う、これが落ちて着いていられ」
そこで、無情にも電子の鐘の音。時間切れの合図が到来した。三時間目の始業を知らせる救世主の到来に、一夏は安堵のため息を一つ。
「っ……！ また後で来ますわ！ 逃げないことね！ よくって！」
そんな三流悪役のような捨てぜりふを吐いて、セシリアは自分の席に戻っていった。
まあ次の時間になったらきっと忘れているだろう、このことについて考えることをやめて、一夏は参考書と授業を行き来する授業に望んだ。

第五話 操縦者まで扱いが不遇になってきた今日のこの頃と

(何かで消さず)

お疲れ様でした。

……また、奴は出てこなかった！ 早く出るテンペスタ？ (……毎
回言っている気がします)

次回はお待ちせしました。エマさん無双の番です。
英国似非貴族様が毒牙に……！ の予定ですので。(予告)

第六話 またの名を番外編 動き出す影と不遇な機体の先輩の活躍（前書き）

タイトル通りです。急ごしらえなんで意味不明・描写不足・誤字脱字が目立つかもしれません。ご注意ください。
それでもいいという方、どうぞ。

……すみません嘘つきました予告通りになりませんでした……。
つ、次こそはエマさんのターンです！（の予定としか言えないのが寂しい……）

第六話 またの名を番外編 動き出す影と不遇な機体の先輩の活躍

篠ノ之束。人呼んで天災。ISを生み出した張本人である。

世界の軍事バランスを崩壊させておきながら、後は知るかといった感じで失踪。彼女の所在を知る者はいない。

だがそれは、接触を計れないという意味ではない。ごく限られたものだけが、連絡先を知っている。

一人は彼女の妹、篠ノ之箒。そしてもう一人は。

「はろはろちーちゃん！ ふりちー束さんだよ〜？」

頭痛がした。彼女と話す時にはたいていこうなるか、それとも怒りを堪えるかまたは呆れるか、という記憶しかない。千冬自身、ほかの記憶はもっていない。

出来れば厄介になりたい相手ではない。しかし事情が事情なため、こうさざるを得なかったというだけの話だ。

「珍しいね〜。こうしてちーちゃんが束さんに愛の囁きをしてくれるなんて」

「何が愛の囁きだ」

電話越しにもわかる、喜色ばんだ声に千冬はうんざりする。するのだが、頼みごとをする以上耐えなければならなかった。

「それとも〜、一人寝が寂しくなったあ〜？」

血管が一人、いや一本憤死した。

「……ほう。よほど命はいらないと見える」

「じよ、冗談。冗談だよちーちゃん？ 束さんジョークだよ？」

「ではこの間言った、『私の言葉にウソなど一つもない！』というのは嘘だったのだな？ するとなんだ、一夏に貴様は手を出したのだな？」

電話越しでもその剣幕の鋭さを感じ取ったのか、束は急ぎなだめようつする。が、横で抱えていた油に引火。大火事になった。

「と、時と場合によるのだよちーちゃん！ 分かっつてよ〜」

「こんなことを聞いたかったのではないのだが。まあいい、本題に戻るとする」

聞こえてきた安堵のため息に、千冬は残酷な一言を加えた。

「追及は別の日にでもできる。今のうちに朝日を十分拝んでおけ。後悔しないようにな」

「……………」

電話に擦れる髪の毛の音しか聞こえなくなったのに満足し、千冬はようやく用件を切り出した。

「エマヌエーラ・モスカについて調べてもらいたい」

「……………？ 誰？」

ようやく絞り出した束の声は、感情の加えられていない無機質なものだった。

これは想定済み。他人に興味のない束は、人間個人の素性を調べるといふことに乗り気ではない。曰く、面倒なのだ。まあ確かに興味のないこともしくは全く興味を持ってないことを調べるといふのはいささか面倒なことか、とこの時はかりは千冬も天災の意見に同意した。学園の教師である千冬も、国際犯罪組織について調べ上げておけなんて言われればうんざりする。つまりは、そういうことだろう。

「イタリア代表候補生、らしい」

「ふうん」

このいかにも含みを持たせた”らしい”という発言に対しても生返事。上の空、対称物に全く興味を持っていない証拠だ。千冬と出会ってから今まで元々妹である篠ノ之箒と織斑千冬、そしてその弟である織斑一夏以外に興味を持つことはなかった。実の両親ですら無関心、ただそこにいる”モノ”として見ている束である。これは仕方ないともいえる。

それでも千冬にとつては全くもって構わない。興味があるのは千冬自身で、調上げる束ではない。故に篠ノ之束の都合など知ったことではない。冷たいような言い方だが、束自身そういう自分の都合

を優先させる節がある人間なのだからそれはお互い様というものだ。加えて。

「しょうがないなあ。ほかならぬちーちゃんの頼みだし、調べてあげるよ」

「すまん。恩に着る」

篠ノ之束は織斑千冬の頼みごとは断らない。過去、一つの例外もなく結局引き受けて見せたのだから。

「ふふふ。その代わりにちーちゃん、デートしょ？」

「勝手に言っている引きこもり。まずはお前が私に姿を見せる」

そのやり取りで、千冬は携帯電話の電源を落とした。再び連絡が入ったことを知らせる携帯電話。電源を落とし、マナーモードで音が出ないようにしているのにもかかわらず、登録もしていない束の喘ぎ声で鳴り続けるそれらを一切無視して（実際はあまりにイライラして携帯をへし折って強制的に鎮圧した）、千冬は一人考え込む。

エマヌエーラ・モスカ。イタリア代表候補生。しかし、千冬はエマヌエーラのことを知らなかった。こう見えても織斑千冬はIS操縦の才能を持つ各国の代表候補生やその代表候補生と肩を並べるくらいの潜在能力を秘める生徒を受け持つIS学園の教師だ。出来てからあまり時間は経っていないが、毎年毎年入学してくる生徒もみているのである。いくら関心がなくとも、各国の代表候補生の情報など簡単に入ってくる。

その千冬が、エマヌエーラ・モスカという代表候補生を知らなかったのだ。イタリア代表候補生を知らなかったわけではない。元々、イタリア代表候補生はもともと別人だったのだ。

なぜ今になって変わったのか？ そもそもなぜ交代したのか？ そもそも交代という表現は正しいのか？ そしてなぜ何の連絡もなくすり替わっているのか？

さまざまな疑問が千冬の頭を駆け巡る。元々の代表候補生に何か欠点があったのか？ いや、テンペスタ？を操縦するのにふさわしいランクを兼ね備えて、稼働時間もだいぶあったはずだ。それはあり

えない。ならば本国の都合かと言えばいまいちピンとこない。その他の要因は……？

「私も、さほど変わってはいないか」

纏まらない思考を打ち切り、千冬は一人肩を下ろした。

これらの建前を、東はどう受け取ったのだろうか？ 千冬にはわからない。分からないのだが、建前とは違う部分に目が言っていることには気が付いている節があった。おそらく、というか確実にばれていると見ていいだろう。最も、全く問題ないのだが。

「……」

公式戦負けなしの初代モンド・グロツソ優勝者。第二回大会も優勝まで勝ち進んだ。その後電撃的に引退、まさにIS界におけるカリスマ的存在。本当に出来過ぎた結果だと笑いたくなくなった。本来ならばこれらの輝かしい成績は、彼女のものになるはずもなかったのだ。千冬が何度挑んでも一度も勝つことの出来なかった、史上最強と言われる千冬をもつてしても歯が立たなかった本物の天才、イレーネ・ベルトリーニ。稼働時間、ISに使われている技術差の不利を跳ね飛ばして千冬を破って見せた傑物。第一回モンド・グロツソ前に彼女が悲劇な事故で命を落としかからこそ、優勝の旗が千冬のものへ回ってきたのだ。千冬からしてみれば回ってくるはずもなかった称号・ブリュンヒルデなんて呼ばれるたびに違和感を感じずにはいられないのだ。

機動が、あの人に似ている。試験の時、何故が頭によぎったのだ。

本当に彼女は何者なのか？ あの人の関係者なのだろうか？

その疑問が解消されるのはいつになるだろうか。ただのIS学園の教師である千冬には全く持ってわからなかった。

「イレーネ・ベルトリーニ」

その名前を口にして見ても、謎は深まるばかりだった。

「戦闘を開始してください」

その言葉に引き続くように、ミカエーラは機械的に引き金を引く。発射された弾丸は、いともたやすく人を貫き、抉ってただの肉片に変えてしまう。

こんなものは作業だ。それは知っている。ではなぜ自分がこんなことをやらされているのか？ ミカエーラは全くもって理解できていなかった。

それも仕方ないことだ。ミカエーラがやっていることと言えばISによる既存兵器の駆逐だ。それは兵器を操る人間にも言えること。つまりところ今ミカエーラがしていることは虐殺と同義だ。

それらの対象になっっている彼らに全くもって罪がないとは言わない。現在の政府のあり方に、世界の在り方に不満を以っているのは仕方がない。女尊男卑の今の世の中になってから彼らは迫害され続き、徹底的に貶められてきた。そんな彼らの扱いは、中世で言う奴隷と一緒にだ。ただ何も持つことなく自分の全てをささげて世界の女性のために貢献する。不満を持たないわけがない。

彼らの不満はたまっていく。その溜まりに溜まったフラストレーションを、彼らはテロ行為によって解消してるのだ。男の尊厳回復、ISの撤廃をスローガンに掲げて活動を続けてきた者たちだ。彼らは主にISの関連会社と主義者（ISを至上として崇める男性のことを彼らがそう呼称している）の排除を行っている。

だからと言って、こんなことで世界が変わるわけではない。テロリズム至上主義はもう古い。そんな旧世代の概念は、ISという超兵器によって木っ端みじんに砕かれてしまったのだ。

「ぐあああああ！」

「なにが、何が起こっているんだ！」

「ぐえええええ！ 裏切り者だ！」

そうではない。殺しているのはミカエーラだ。しかし、彼らは味方が裏切ったと信じて疑わない。なぜなら彼らの目にはミカエーラの姿は映ってすらいないのだ。

「システム良好。戦闘の継続を指示」

中性的な機械音声に導かれて、再びミカエーラは引き金を下ろす。命が散つていく。例外はない。理不尽にも平等に。

「どこに居やがる！ 居るのは分かっているんだよ政府の犬があ！」
「お前らはどこまで腐っているんだ！ お前らが守りたいものは理想か！ 汚い女たちの優越感か！」

そのどちらでもない。ミカエーラ自身は政府の犬ではあるが、残念ながら彼らのいう政府とは全く別物だ。ミカエーラの飼い主はイタリア政府であり、彼らの言う政府とは自国の国家組織、イスラエル政府だ。彼らは今回の攻撃をイスラエル政府の仕業と思っっているらしい。

相当のバツクボーンがなければ、街中で銃を乱射するという暴挙には出られない。そんな暴挙に出て見せたのだから、背後の組織の大きさはとんでもない規模であるのは間違いない。大きなIS関連企業か、はたまた国家機関か。彼らは極度に恐れている国家機関ということにしたのだろうか？ 詳しいところはミカエーラには分からないが、見ている限りにはそのように受け取れた。

何と言う視野の狭さと嘆くのがいいのか、それともたったそれだけの情報でそこまでたどり着くことが出来たのを褒めればいいのか？ 全くもって判断が付かない。いずれにしても、前提が間違っているのだから彼らが正解にたどり着くことはないのだが。

「馬鹿！ 慌てるんじゃない！」

勘のいい傭兵崩れか軍人崩れか分からないが、勘の良い人間はこれは仕組まれたものだと気が付いている。今回の襲撃IS研究所襲撃の際にぴたりと襲撃されたのだ。動きが筒抜けなのは分かるだろう。そもそも彼らをこんなところまで誘導したのかはミカエーラの理解の範疇だ。興味もないので考察はしない。

IS研究所前で、一進一退の攻防は続く。
きよるきよると周りを探し回り、何とかして襲撃者を見つけ出そうとしている。

「見つかる訳がないのに」

その声は、音になることはない。それをミカエーラ自身理解している。

今回のこのISによるテロリストの国立IS研究所襲撃に対する迎撃行為の主な理由は新型の機能チェックだ。ステルス機能。それもただのステルスではない。レーザー反応と目視による視覚に対するステルス機能に加え、心音温度その他すべての生体情報を完璧に隠して見せるのだ。当然、声などの機能が入られるはずもない。これもすべてアラスカ条約による規制のための措置だが、それが完成すれば合法的にISを軍事目的に使用できる。分かなければ、知らなければクレームなど来るはずもないからだ。

また一つ、命が散った。赤い飛沫と共に、肉に成り果てた人体が地面に沈む。それを何度か繰り返したところで、ミカエーラの視界に動くものはいなくなった。

大地が、死んでいる。赤い飛沫をまともに喰らった地表はどこどころに肉を転がして。他の部分はすべて深紅に身を包む。

これを凄惨と言わず、一体何と言えはいいのだろうか？

「ミッシュンコンプリート」

ただその音だけが、ミカエーラにだけ聞こえるそれが彼女の存在を認めている。

使用された弾薬、銃器ともにこのイスラエル軍のものを模した特殊なものを用意している。状況証拠から考えて、責任はまた違わず彼らに降りかかるのだろう。

終わった。人生で最後の仕事を終えた。何の感慨もない。何の感動も、実感も、後悔も。何一つなかった。

自分の人生とは、一体なんだったのであろう？ ミカエーラは自問する。自問して、家庭の意味のなさに気が付いて笑った。

「人形が人生とは。おこがましいにも程がある」

「人形ならば人生ではないのかね？ 最高欠作君？」

突然、良く聞きなれた声がミカエーラの聴覚を塞いだ。現場を離脱しつつ、ミカエーラはただ聞き手に徹する。

「こんなところで終わるのかね、君は。いや違うな、こんなところで終わっていいのかね君は」
終わらない。消えない。そんな思いはない。そんなことを想定したとしても、それは所詮叶わぬ夢。

出来そこない、欠陥作、金食い虫の駄作。本当によくここまで生きてきたものだ。ミカエーラ自身不思議に思っている。

それも今日でもう終わり。終わるしかないのだ。
金が掛かるとか、駄作だからとかは一切関係なく。ただ単に、身体がいい加減耐え切れなくなってきた。

低コスト、ISの操縦、生身での高い戦闘能力。これらをすべて備えるために、身体の強化を重ねてきた。薬薬薬。いい加減どのくらい投与したのかはわからない。気が付けば定期的に高い薬を打ち続けなければ行動することが不可能な体に成り果てた。内臓器官はもうまともに機能していない。身体のどこもかしこが悲鳴を上げて、まともなのは頭くらいなものだ。
もう、終わっているのだ。

「続きが欲しいとは、思わないのかね？　こちらには案がある。君が同意してくれるならば、戸籍と名前、そして新しい身体を提供しよう。慣れるかどうかは君の才能次第さ。何、僕も薬漬け人形を作るだけじゃなくて新しいジャンヌの採掘に走っているわけだよ？

分かるかね？　君はその試金石、実験体になってもらいたいのだよ。どうだ、君にも私にも悪い条件ではないはずだが？」

未来。全く見えなかったものが、縁のなかつたものが転がってきた。ミカエーラは感覚のなくなってきた身体で必死に頭を働かせる。うまい話には絶対に何かあるのだ。そうでなければこの世の中上手く転がっていくはずがない。イスラエルがイタリアに要請した今回の事件のように、組織や個人がただで働くことなどないのだ。乗せられればそのつけは自らで支払うことになる。

「分かった」

それでもいい。明日があるならば。この命に何か意味を見いだせる

ならば、いくらでも支払ってやる。ミカエーラは決心した。しかしここで一つ大きな問題が発生する。

「もうすぐ合流地点なのだ」

違う。正確には今回の新型装備を背負ったテンペスタを研究者どもが回収しに来るのだ。そのついでにミカエーラの身体は回収されて、機能停止したうえで徹底的に調べ上げられることになっている。

それをどうやってごまかすつもりなのか。返答は、弾んでいた。

「死んでもらったよ」

「……」

「うん言い方が悪かった？　じゃあ言い直すよ。邪魔だから全員虐殺した。面白いよ？　バラバラ死体とかめじゃないくらいに。そうだなあ、例えるならば中国でよくやっていた車引きと釜茹でと同じくらい？」

「新合流地点は何処だ」

流した。やはりまともではない。しかし今更契約を無視はできない。悪魔と提携してしまった以上、地獄に墮とされるまで延々と追われ続けるのが定めなのだ。履行などしようとすれば、即破滅が待っている。

目をつぶればいい。見たくないのならば、無理に見る必要などない。目を開けていようがまいが、未来が来るのは確かなのだから。

「座標は今送ったよ、よろしくね？」

ミカエーラは目を固く閉じた。

「……サルバトーレ・シレア。貴様に言うことは特にない。必要以上干渉するな」

第六話 またの名を番外編 動き出す影と不遇な機体の先輩の活躍（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら作者までご連絡を。

第七話 名付けてセシリア様罵倒の回と

(何か書かれていたようだ)

(前書

タイトル通りです。オルコツ党の方は回避推奨。(話は特に進まない
ので飛ばしても構いません)

ようやく、エマさんの本性発揮。

ナチュラルに皮肉屋ですがな(笑)

この回は、原作だと沸点が低すぎるだろお前ら！ という作者の思
い込みからつくられました。原作よりもセシリア様が大変なことに
……。
後あやふやな知識で書かれています。間違い等ありましたらご連絡
していただけたら幸いです。

後実験的に空白を入れてみました。どうでしょう？
注意はこれくらいで。ではどうぞ。

2011/0613

誤字修正

第七話 名付けてセシリア様罵倒の回と

(何か書かれていたようだ)

一、二時間目とは違い担任である千冬が教壇の上に立っている。隣に控えている教師である麻耶もメモをせっせと取っている。クラスメートたちの視線は先程用も真剣さを増しており、ノートを書く手も力が入っているようにうかがえた。その様子を目にした一夏は、無駄なことを考えるのをいっさいやめて千冬の言っている内容を理解することに集中した。

「ああ、そういえば忘れていたが。再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

本当に今思い出したかのようにいったん授業を中断して、千冬が言った。クラス代表。参考書はそこまで読み進めていないので詳細は分からないが、(すでに参考書に載っていると信じて疑っていない) たぶん千冬の口ぶりから予測すると、この一年一組というクラスの中から一人を選抜して、他のクラスの代表と競わせるのだろう。それがISを使った何かである、とまでは一夏に想像できるのだが、いかにせん予備知識が不足しているためそれ以上の想像をすることができなかつた。それに予想なんて外れるものだし、と一夏は自分の姉の話に耳を立てた。

「クラスの代表者というのはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラスの長だ。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で対した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

それって学級委員長のIS学園版じゃねえ？ そんなもの誰がやる

んだらうか、本当なやらされる奴は災難だな。まあ俺はこのありさ
まだし関係ないけど、と早くも傍観者を気取るうとした一夏の身に、
災難の火の粉が対岸から降り注ぐ。というよりも対岸から火の粉が
輸入された。

「はいつ。織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

織斑君、もしくはオリムラ君。それだつたら関係がないな、と一瞬
自分のこともしれないと思つた一夏はひとまず安心。頬杖をつい
て傍観者を気取る。

「では候補者は織斑一夏……。ほかに誰かいないのか？ 自薦他薦
派問わないぞ？ このまま行くと織斑一夏の無投票当選になるぞ？

向上心のある奴はほかにはいないのか？」

鋭い眼光が教室の一番前の真ん中の席をとらえてから、オリムライ
チ力君と珍しく千冬が含みを持たせるような言い方をした。同姓同
名。そしてもつてたぶん響きから考えると織斑一夏君。ぴったりと
漢字まであつた他人。そして何かの合図とも取れる千冬の言葉。そ
こまで考えて、ようやく一夏は同姓同名節を捨てた。そもそもよく
考えてみれば、男でISが使えるのは一夏ただ一人なので、君付け
などという呼名の仕方はしないだろう。ここまでされたらもうほぼ
確定だ。わざわざ女の子を呼ぶときに君付けなどいじめのようなも
のではないか？

結局のところこのクラスにとって、織斑一夏という存在はつまると
ころ、体の良い生け贄。珍しいパンダ、と言い換えてもいいかもしれ
ない。珍しいものがそこにいるのに、御輿に担ぐがない、なんて
ことはありえないのだ。十代女子のパワーを、一夏は見誤っていた。
時はすでに遅く、見方不利のこの形勢は変わりそうもない。無駄と

「待つてください！ 納得がいきませんわ！」

机をたたき轟音を発生させる、という二番煎じ極まりないやり方で抗議を意を示したのは、やはり先程一夏に噛み付いてきた英国代表候補生セシリア・オルコットだった。いかにも心外だとばかりに表情に苦痛さをにじませて、彼女は熱弁を振る舞う。

「そのような選出方法は認められませんわ！ 大体、男がクラス代表ですって？ どの公開羞恥刑ですか！ IS登場以前ならまだしも、今の世の中とあつては恥さらしにも程があります！ わたくしに、このオルコット家当主であるセシリア・オルコットにそのような屈辱にまみれて一年という非常に貴重な時間を無駄にしるおっしゃるのですか！ それはあんまりというものではありませんか！ 前時代的甚だしいですわ！」

かなり熱が入っているのか、何度も何度も机をたたく。手が真っ赤になって痛くないのだろうか、などとセシリアを見ながらわりとどうでも良いことに一夏は気を取られていた。どこかで、ばきりと何かが割れる音がした。

「実力から見ればわたくしがクラス代表に選出されるのは自明の理、必然、運命なのです！ それを、ただ物珍しいからという全く道理の通っていない意見で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような辺鄙な島までわざわざISの操縦技術を学びに来ているのです！ サーカス団の一員になど死んでもなりたくはありません！ そういうのは私のいないところでやってくださいまし！ そもそも、学園という教育機関で見世物をするというのはどういった見なのでしょうか？ 全くもって理解しかねます！」

いつの間にか、一夏の扱いは人から猿へと格下げされていた。そして先程出てきた日本「田舎・途上国」という何処から導き出されたのか謎の等式が引つ張り出されてきて、それが正しいような扱いにまなっている。そして極めつけに、ES学園までその範囲に及んでいる。おかしい。イギリス、グレートブリテンだって島国のはずなのだ。一方的に見下すのは間違っていると一夏は口の動きだけで抗議する。……どこからか安堵の物がよく分らないため息が漏れた気がしたが、一夏は空耳だろうと気にもしなかった。視界の端を舞う小さな尖った茶色の物体は目の錯覚と処理した。

「良いですか！ クラス代表という地位は、文字からして通り、代表なのです！ いかにも小さな一年一組という三十人程度の井戸のよくな小さな小さなくりであろうと、それを単位にしてまとめあげるリーダー役がクラス代表なのです！ 勿論実力はクラストップのもの、つまりわたくしがなるべきなのです！」

いったいこの何の利益にもならない、ありがたい学校長の長話と同程度の無駄演説がいつ終わるのかということに一夏の関心は移っていた。同じことを何度も言われれば、人間は飽きてしまう。それがどんなにおもしろい話であったとしてもだ。退屈な話ならそれがいっそ強くなる。怒りも同様。もう参考書に戻って良いよなと自分自身に許可証を発行しようとしたそのときに、一夏の耳は確かに拾ってみせた。一夏の琴線にふれる一言を。

「大体文化としても後進的な国で暮らさなくてはならないこと事態私にとっては耐えがたい屈辱で」

この国が、一夏が愛する日本が耐えがたい侮辱にあっている。別に一夏として特別な愛着があるわけではないが、それでもこの日本という国が好きなのだ。それはもはや意識のうちに出ない、無意識のう

ちの刷り込みという領域に記録されている。だから、普段特に気にかけてたりはしない。だがそこまで言われて黙っているほど一夏はおとなしい気質ではなかった。

腰を浮き上がらせて、息を大きく吸い込んで。今こそこのたまりにたまった文句を発散するべきだと意気込んだ。

それでも、そこから先に一夏が発言することはなかった。それは何者かが、一夏の発言を遮るようにして言葉を作り出しているにほかならなかったからだ。

誰だ？ 一夏は中腰の体勢のまま後ろを向いて、すぐに見つけた。金色の髪を自由に踊らせているサングラスがトレードマークの、参考書を一夏に渡してさりげなくサポートしてくれた、彼女だった。

「よくもまあそこまで口が回るわね。驚きだわ。流石、貴族は本当に言い訳と他者の攻撃に対しては口を回すわ。弱者をいたぶるということに対して罪悪感をはじめから持ち合わせていないと言うのは致命的な欠陥ね。そうは思わない、Missオルコット？」

「……」

鋭く尖ったナイフで詰め寄られたセシリアは、何も語らない。ただ口を開けて惚けているだけだ。

そんなセシリアを、エマは笑った。

「あら、どうしました貴族様？ だらしなくお口を開けていると憤みがないように思われるわよ？」

それはそうと、あなたのお国の誇りは伝統的な文化と先進的な文化でしたか？」

「……ええ」

やっとの思いで、セシリアはそう答えた。表情は暗い。その沈んでいる様子を、しかしエマは全く省みようとはしない。

「それでは聞きますけど？ あなたの国にそれほどの歴史ってあり
ましたっけ？ 私から見れば、子供の戯れ言のようなものじゃない
？ 日本もイギリスも大差ないわ？ 違う？」

「違いますわ！ 大体極東の野蛮人と一緒にされるのは大変な屈辱
で」

それどころか挟ってさえ見せている。すごいな、と素直に感心する
一方で、一夏はセシリアのその台詞に、どうしようもない怒りを覚
えた。イギリス人と日本人。そんなに差があるとはとうてい思えな
い。古来より人間としての仕組みは、対して変わっていないからだ。
現代人ならば、それも顕著なはず。人間生きていくためには食事と
水が必要で、動物にはない言語を操る。法を守り国を愛する。一体
両国民の間でどれほどの違いがあるというのか？

それでも、一夏は口を挟めない。そんなやりとりをあざ笑うように、
エマがセシリアを糾弾しているからだ。

「ふふふ。本当におかしな人。頭の原材料が豆腐だったり、目がガ
ラスだったりするの？ それとも頭が馬肉だったりして？ それな
ら仕方ないってあきらめてあげるけど？」

まあ、良いわ。蛮族と言うからには当然、自国民は当然優れている
んでしょうね？」

「勿論ですわ！」

エマの売り言葉に、セシリアは胸を張って堂々と宣言する。どうや
ら完全に立ち直ったらしい。背中には貴族オーラとでも言うべき風
格が備わっていた。

そんな威風堂々と言った様子のセシリアを、エマは何かかわいそう
なものでも見るように見つめていた。

「何ですか、その目は！」

「盲目盲目と思っていたけど、これほどまでとはね。少し感心していたの。」

まあ、どうでも良いわ。あなた、エリザベス一世ってご存じ？」

「……馬鹿にしていますの？」

「いいえ、呆れてものもいえないだけで、別に馬鹿にしているわけではないわ」

「それを馬鹿にしているって言うのではなくって！」

いかにも、憤慨と行った態度でセシリアは自信の胸に手を当てた。

それを見るエマの目は、相変わらず暖かさが見受けられない。人間ではなく、汚らしいゴミでも見る目つきだ。少なくとも、一夏にはそう窺えた。

「エリザベス一世。1558年に即位したチューダー朝最後の王。

国教会の体制の確立、産業・貿易の奨励と功績は数多く存在する人。一番の功績はオランダ独立の支援とスペインの無敵艦隊の撃破。そんな彼女だけど、おもしろい逸話が残っているのはご存じ？」

「……おっしゃっている意味が分かりかねます」

「そう。残念だわ。」

彼女の時代、ヨーロッパには銀食器の文化がないという話があるわ。正確には銀食器の文化ではなくて、銀食器でものをつかむ、という文化なのですけど。流石にここまで言えばもう言いたいことは分かったでしょう？」

「……」

「都合の悪い時はだんまり。呆れた人ね、あなた。社会ではそんなんで通用しないわ。」

日本人が野蛮人？ よくもまあそんな大口たたけたものね？ 日本はこのころにはとくに食器を扱う文化が存在するわ。食器だけでなく、勿論今現在ではなくてはならないあるものも、だけれど。箸、

というんでしたっけあの棒みたいなものは。それを使って食事をとると言うことが、当たり前のように庶民にまで伝わっているのよ。女王陛下でさえ肉を素手でつかみとって食すイギリスが存在するその時代に？ 意味、分かる？ ねえ、貴族様？」

「……」

そうだったんだ、知らなかった、といえる雰囲気ではないが一夏は素直に感心した。日本のことをよく調べているエマに、一夏は好印象を持った。……よく知りもしないで後進国だのサーカスだのと批判ばかりするセシリアとは対照的に。

「それにこんな逸話もありますよ？ 日本で言う明治時代、その当時産業革命を済ませていたイギリスはそれまでの工場制手工業から一転して工場制機械工業に変わっていた。主にインドから綿花を大量に購入し、そして自前の工場で綿製品を大量に生産していた。それを清国に輸出が思うように行かなかった」

「……何と言いたいんですの、あなたは一体？」

セシリアの目が、光っていた。炎を宿すその瞳は、明確に怒りを表していた。

しかし、そう簡単に追撃の手は休まらない。

「せっかちな方ね。もう少し時間にゆとりを持った方がいいわ。」

なぜかというところ清国はその当時から絹織物の技術は高かった。日本なんかは古来、それも随分と昔から生糸が欲しくてたびたび交易していたくらいにね。そんな国内の高性能製品があるのにわざわざ質の低いイギリスの製品なんか買うわけがない。まあ当然ながらに売れなかった。

どうしても綿織物売って利益を得たかったイギリスはこう考えた。なんだ、戦争をして清国を負けさせて清国に高い値段で買わせれば

いいんだ、と。これが先進国の姿？ おかしくて腹がよじれるわ。ねえ、どう思う？

ちなみに一つ聞くけど、世界で最初の株式会社ができたのはどこか知っている？」

「それは当然イギリ」

「話にならないわ」

もうおまえはしゃべるなど言わんばかりに、エマは手を振った。臭いものにあっちに行けと命じるように。先程のゴミを見る視線と相まって、というよりもセシリアをまともな人間扱いをしていないことは明白だった。

一夏はその姿を見て、己を恥じた。ただ淡々と事実のみを押しつけて揺らがないその姿には、自信と言ったものは見受けられない。これぐらいいいえと当然だという態度は、素養が特にあるわけでもなくただただ己の怒りにまかせて暴言を吐こうとしていた一夏の胸の内に反省を促しているようにも思えた。自分だったらせいぜいイギリスの料理がまずいことを言うくらいだっただろうと考えると、つくづくエマが不思議な人に見えた。

人間離れた容姿。当然のように身に付いている深い知識。そして気づかぬうちに他人を圧倒させるカリスマ性。どれをとっても、一夏の記憶に彼女に勝る能力の持ち主はいなかった。勝負になるとしたら千冬で、それも僅差での勝負だ。もしかしたらその素養はかの大天才、篠ノ之束とも勝負になるかもしれないと考えると、自分のことでもないのに誇らしく感じた。

「世界初の株式会社ができた国は、あなたが遅れた国とさんざん馬鹿にした日本よ？ 知らないかもしれないけれど、江戸時代　つまり1600から1867間での期間の日本のことなのだけれど、流通システムについては世界一といられていたわ。現在でも世界の穀物事情の手綱を握っているシカゴでも、江戸時代のシステムを参

考にしたと言われているくらいよ。

あら、どうしたの？ 先ほどまでの勢いはどこに行ったの？」

保てるわけがない。それだけ言われて自信を保てるならばそれはよほど厚顔無恥な人物か、はたまたただの阿呆か。セシリアはどうやらそれに該当しなかったらしい。ただうつむいて、唇をキツく噛みしめている。

流石にここまでくると、一夏はセシリアがかわいそうに思えた。ここまで正論で論破されては彼女のきょうじも跡形もなく蹂躪されてしまっただろう。それは流石にあんまりのように思えた。

「……」

「黙りね。ほんと、貴族様は打たれ弱くて困るわ。自分は人を貶すのが大好きなくせにね」

まだまだ言い足りないわ、と落胆した表情のエマに、一夏は安堵した。誇りを傷つけられてポロポロになっている人間をこれ以上畳み掛けるほど、外道ではないようだ。彼女も一応は分別をわきまえているようだだった。

「……んん！」

わざとらしい、千冬の咳払いも今ばかりは有効だった。この圧倒的なエマの独創空間を崩すには。

「お前ら、元気がよすぎるぞ。全く、そんなに力が有り余っているなら外でやれ。はつきり言って目障りだ」

「申し訳ありませんでした」

意外なほどにあっさりと頭を下げて、エマが着席した。その後少し

して、呆然とした様子のままセシリアが席に落ちた。

「セシリア・オルコット。織斑一夏。ほかにいないのか？」

まずい。一夏は本能的に悟った。このままでは二分の一の可能性でクラス代表にさせられてしまう。確立を少しでも下げなければ、やりたくもない仕事を押し付けられる。苦し紛れに、一夏は拳手した。

「なんだ織斑。言ってみろ！」

「俺はエマヌエーラ・モスカさんが良いと思います！ 彼女も国家代表候補生だつて言っていましたし！」

その声を聞いた瞬間。クラスの後方で爆発が起こった。

「あなた、国家代表候補生でしたの！」

セシリアは先程までの上謡から一遍、また勢いを取り戻して立ち上がった。打たれ弱いが、復活は早い。面倒な性質だった。

「始めに言ったと思うけど？ 聞いてなかったの？」

鼻をつまみ、手を何度も振ってセシリアを拒絶する。心なしかセシリアに向けられている眼が、一夏の方を向いているように思えた。どうやらクラス代表候補にしたのを責めているよろしい。予想外の冷たい視線にぶるりと、一夏は体を振るわせた。

「この屈辱、必ず果たして差し上げますわ！ 良いですこと？ 私
は学年で唯一、教官を倒した入試主席。エリート中のエリートです
から！」

「あ、それなら俺も倒したぞ？」

「何ですって！」

セシリアが素つ頓狂な声を上げて、こけそうになっていた。その後何事もなかったように腰に手を当てて反転、一夏を指さした。

「この、極東の猿もですか！」

「あなた、本当に学習しないのね。本当に同じ人間なのか疑いたく……。ああ、あなた似非貴族って言う新種の動物だったわね。ごめんなさい、人間と同列に扱うのは失礼だったわね。」

まああなたの素性なんて正直どうでも良いけど、人を指さすのはやめなさい。とある地域では人差し指で数えるのは豚だけ、ということもあるのだから。あなたを数えるのとは違うの、分かる豚さん？」

貴族 似非貴族（新種の動物） 豚とまるで勢いよく坂を転がり落ちるようにセシリアの立場が転落していった。哀れ、と一夏が思うまでもなくセシリアが顔を真っ赤に染めた。どうやら今の一言はセシリアにとって相当耐えかねるものであったようだった。

「……………決闘ですわ」

「流石野蛮な英国人。口で反論できなくなるとすぐ手に持った棍棒で暴れ始める。米国のことを笑えないわよ」

「……………ここまで公衆の面前で辱めを受けるとは。覚悟なさい」

「……………私個人的には、暴力反対なんだけど。棄権はやっぱりできませんよね、織斑先生？」

「当たり前だ」

最初から結論が出ていたのか、言い切る前に千冬が遮ると、エマは明らかに肩を落とした。実戦が苦手なのかな、と勝手な想像を一夏は抱いた。

「なら、提案があります」

「言ってみろ」

「くじ引きで初戦を決めるというのはいかがでしょうか？ 流石に三人でのバトルロワイヤルというわけには行きませんから。それにリーグ戦をしているほどアリーナの使用時間はないと聞いています。いかがでしょうか、織斑先生？ 初戦に当たらなかつた人物はシード権ならスムーズにことが運ぶでしょうし。優勝者がクラス代表。分かりやすいでしょうか？ 運も実力のうちって言いますし」

「……ま、いいだろう。モスカの提案に乗ろう」

そういうと、千冬は即興であみだくじを出現させた。エマが苦い顔を作っていたような気がしたが、一夏の錯覚だろうか？

「引け。まずは織斑からだ」

正直シードだけは勘弁してくれ、と思いつながら一夏は真ん中を選んだ。確率三分の一。運が悪くなければ初戦を引くことができる。初戦を戦えば、ISの戦い方が分かるかもしれない。一夏がそう考えた結果の祈りだった。

「わたくしですわね」

呼ばれてもいないのにセシリアが勝手に出てきて、くじを引いた。引いた場所は左端。必然的にエマは右側となった。

「これが結果だ」

神様俺のこと嫌いなんですか？ 一夏は嘆息した。当たりたくないシードを引いてしまったからだ。だがこうなってしまった以上は仕

方がない。覚悟を決める。

「目にもものを見せてくれますわ！ 泣いて謝ってって絶対に許しませんからね！」

「……面倒な。本当に呪われているの？」

両者の反応は両極端。片一方は勇み、もう一方は沈む。自分はどちらだろう？ その考えは、結局答えが出なかった。

「全く、無駄なことに時間を喰ったな。話したかったことほとんど説明できていないがまあ良い。号令」

チャイムの音が、三時間目の終了を知らせていた。

「決闘、つていえばこれね」

チャイムが鳴った後、エマは己の左手につけている手袋（正式名称が一夏にはわからない）をセシリアに放り投げた。

「……なっ！」

顔をゆでだこのように、真っ赤に染め上げる。ストレスは健康によくないぞ、と心の中で忠告。（するにとどまる）

はて、この行為にいったい何の意味があるのか？ 疑問を浮かべていた一夏に、エマが答えた。

「決闘の合図、似非貴族様にはわかるでしょう？ それとも、薔薇を投げつける方が良かった？」

「かのような屈辱、忘れませんわ。覚えていなさい！」

決闘の合図だったらしい。でもなんであんなに怒るのかな？ などとすつ呆けた考えが、休み時間が終わるまで一夏の頭の中を支配していた。

第七話 名付けてセシリア様黒倒の回と

(何か書かれていたようだ)

(後書

お疲れ様でした。

何かあれば、作者まで。

第八話 舞台の裏側？ とポンコツという事実が発覚する不遇な機体（前書き）

長い合間お待ちどう様でした……待ってない？ 調子に乗るな？

そ、そうですか……。

とりあえず、完成です。……何とか形にはなっていると思いますが、

誤字のほうか……。発見しましたら、どうぞご連絡を。

それではどうぞ。……今回は短いですけど……。

第八話 舞台の裏側？ とポンコツという事実が発覚する不遇な機体

面倒なことになった。

素直に認めよう。私はどうかしていた。

織斑一夏。どこかの変態は「天然フラグメーカー」と口をそろえて言っていた。どういう意味か聞いてみたところ、何でも自覚なく魚を釣り上げてそのまま餌を与えずに放置する鬼畜外道のことらしい。……言わんとしていることは分かるけど、魚って……。

織斑一夏は授業中、頭を抱えていた。

講義の内容が簡単すぎるのか、はたまたこの環境が非常に居心地悪いのかとその内容を推測していた私は、思わずイスから転げ落ちそうになった。

「……ほとんど全部、分かりません……」

言葉通りにとるならとよけいなことを考えていた私は、常識に捕らわれていた頭を刷新。

そもその前提を考えてみることにした。

織斑一夏は、世界で唯一男でISを使用することのできる人物だ。原因は定かではないが、どうやらそういうことらしい。

IS学園には、基本的に大変厳しい試験をくぐり抜けたものしか入ることができない。ただし、織斑一夏に関してはその対象になりえない。理由は上記の通り。そうなればどうか？

もちろん、勤勉かであるとは限らない。むしろ無理矢理入学させられたと言った方が納得できる。立場的に言えば、常に暗殺の危機に

瀕している国家元首と同じくらい、いや護衛がないと言うことを考慮すればもつとも危険かもしれない。幸い、身内に織斑千冬という強力なバックアップが存在するため排除しようと国が動き出すとはほぼ間違いなくないが、会社組織に関しては話が別である。手に入らないのであれば消してしまえばかりに動き出し、前の誘拐騒ぎではすまない規模のものに発展するかもしれない。それを考慮して日本政府は管理も兼ねてIS学園に入学させるに決まっている。無理矢理入学させられた、彼。当然意欲などない確率の方が高い。事前の当然やっているであろう予習も、こなしていないのだろう。私は、織斑一夏に接触することに決めた。最初は投げていたにしても今も頭を抱えているということは本当は何とかしたいのであろう。……私がそう見ているだけかもしれないが。

「その必要はありません」

顔を青くして無条件降伏しそうになっていた織斑一夏　長くて面倒なので織斑君としてあげましょう飽きるまで、の元に救済の手のごとく手を差し伸べる。この行為で好感度が下がるならばもはや織斑君とは徹底的にスタンスがあわなない。それならば織斑君（早くも飽きてきた）の籠絡を政府も断念するだろうと見越しての接触だった。

「……どうしたモスカ？」

織斑千冬が理解できないといった表情を浮かべていた。無理もない。遅刻してきて早々何かやろうとしているのだ。警戒をしておくに越したしたことはない。……まあ、無駄な心配なのだけれど。

「入学資料は私が持参しています。もう必要のない物ですので織斑君に譲りたいと思います」

できるだけ声を和らげて、相手に表面上の誠意が伝わるようにのどを通す。前に誰かが言っていた、心を揺さぶって離さない魔力に満ちた声（その人物命名）を出して、顔の筋肉を動かす。……織斑君（だんだん不快になってきた）は思わず振り返っていた。……感觸自体は悪いものではない。そのまま仮面をかぶり、演技を続ける。

歩き方さえ優雅に見えるように。その挙動一つ一つにも色気を振りまくように。入学前に配られる分厚い資料を腕に抱えて織斑一夏（完全に飽きた）の元へ進む。先ほどよりも殺気が濃くなった。今にも木刀を取り出そうとしているが、私は見て見ぬ振りをした。先ほどから織斑一夏は、ずっと私を見つめ続けている。うぬぼれではないだろうと確信できる。現に瞳は私しか写しておらず、先ほどまであんなに気になっていたはずの周りの反応も気にしていない。……うぬぼれではないと信じたい。確か織斑一夏は周りにいる篠ノ之箒という女子の些細な感情の揺らぎさえも分かっていない。単に物珍しいだけかもしれない。……忘れよう。内心の落胆と自己嫌悪を表に出さないように、本を差し出す。

「これを」

「？ ……ああ、ありがとう……？」

それだけ言って、私はすぐにきびすを返した。下手すると動揺しているのが発覚する。それはこの先に面倒な事態を引き起こるだろうと言うことは簡単に想像がついた。あの一般人だったら手を出さずとも殺害可能な殺気を誰が好き好んで浴びたがるだろうか？ 篠ノ之箒の警戒度を、織斑一夏との関係性の危うさを考慮して一段階引き上げる。只の忌もつと（誤字に非ず）ではなかったようだった。

……面倒な……。

「わからないところあれば、聞きにきて。1027にいるから」

顔を見ずに。最低限のことだけを伝える。わざと小物（指輪。変態から送られてきたものだがとある事情で持っていなければならぬ）ができることなら今すぐに捨ててやりたい（を落とし、織斑一夏の耳元に唇を近づける。ちょうど吐息がかかる距離は測定済みだ。

「あ、ああ」

「それと」

私は面白いものを見た、とでも言うように妖艶にほほえんで見せる。どんな反応をするのか？ 試してみた。

「私は男が嫌いなの。それだけは頭に止めておいて頂戴」

歩みを再会しながら、横目で織斑一夏を盗み見る。信じられないものでも見たような顔つきに、とりあえず満足したということにしておく。……決して期待はずれで少しもおもしろい反応であったなどと言うことではない。決して。

授業が終わった後、今までの遅れを一気に取り戻すように参考書をひたすら織斑一夏は読みふけていた。その集中力はやはり、ただ者ではない。少なくとも動物園の檻に投げ入れられても集中さえしてしまえば気にならないらしい。

進むペースから考えて、織斑一夏は頭が悪いわけではないらしい。むしろ今まで真っ白だった分、湯水のように知識を吸収しているかもしれない。

途中イギリス代表候補セシリア・オルコットと一悶着があったが、特に問題にならなかった。思ったよりもイギリスという国は情緒教育というものをしないらしい。あからさまな挑発に乗ってお粗末な知識を連発する位なのだから、間違いない。もしかするとISの操縦技術も口先だけで対したことがないような気さえしてきた。油断

は禁物だが、この程度の小物が強そうとはとうてい考えられない。これだけならば、問題はなかった。パツピーエンドで大団円という結果だった。

「俺はエマヌエーラ・モスカさんが良いと思います！ 彼女も国家代表候補生だつて言っていましたし」

そう。織斑一夏がよけいなことを言わなければ。

これを断れるか？ ……いや無理だ。残念ながらそれは過去の判例（織斑一夏事件……こうかくと不思議と神秘性が増す）で証明されている。

「あなた、国家代表候補生でしたの？」

……頭が痛くなってきた。人の話を聞いていないにもほどがある。予想はしていたけれど。国家代表候補生のブランドを木っ端みじんにたたき壊した頭の弱い英国人は、もうどうしようもない。せいぜい蒼い雫のデータを供給してくれることを期待せずに待っていることしかできない。

問題は、私のISにある。睡眠時間を削ってまで作業しても、まだ完成に至っていないのだ。最悪訓練機で出なければならぬかもしれない。……それでも負ける気は全くもってしないけれども。

……今日から休み時間さえも返上して作業に当たらなければならぬ。その事実を確認して、私は空を仰ぎたくなった。面倒な、本当に呪われているわ。

織斑一夏がこつちを見ていた気がするけれど、それはどうでも良い。私は授業を受けつつも、テンペスタ？を完成させるための思考を開始した。

そう、そのテンペスタ？が曲者なのである。技術者たちが言っていた八十パーセントだといったのは、どうやら武装面の話だったらしい。

まったくもて起動しなかったといつて思わず切れそうになってしまったのは、どうか許してほしい。それと先ほどの休み時間の言葉がなかったことにしたい。

そもそもなぜ起動しないのか。それはテンペスタ？のコンセプトを語らなければならない。

そもそもこのテンペスタ？は、第三世代の中では、最後発の期待だ。ブルーティアーズとシヨヴァルツエア・レーゲンに遅れること一年半。ようやく開発がスタートしたのである。

ノウハウがあるわけでもないスタッフ陣は大混乱。何せ第二世代とは勝手がまったくモノって違うのである。

それを相手にして、苦戦を強いられるのは分かる。だけれども言いたい。こんな不良品を完成まじかというスタッフはどうかしている。まあ、だからこそフランチェスカが技術者を連れて行けと言っていたのか。といまさら言っても遅いのだけ。

問題は、そこではないのだ。一週間後に控えるクラス大代表決定戦に、どれだけ完成に近くこぎつけるかだ。正確に言えばもう六日。

……さすがにこの展開は予想だにしていなかった。頭が痛い。……下手をすると学校に配備されている量産機の打鉄やR・リヴァイブのほうの結果を出せてしまえそうだ。……国の威信をかけているのでその手が使えないものが残念で仕方がない……。

愚痴っても物事は進行していかない。気籠を決めて、私はテンペスタ？の改良を始める。

「……………」

予想外すぎる。本当にこれはいくらなんでもあんまりの仕打ちではないかと天を仰ぎたくなった。

使われているパーツを確認して、泣きたくなった。

欧州でしか取れないパーツがちらほらと確認できるのだ。

愚痴を言いたい但我慢して、私は端末を取り出す。

「もしもし」

「はいはいもしもしっ……！ フランチェスカですう！」

したつ足らずで噛み噛みな言葉に一安心して、用件を伝える。

「ああああああああああ！ わすれていたですううう！」

忘れていた？ 怒りが腹の底から這いあがってくる。この感情画面づ語としか起こさないと理解しているのに、抑えることができない。

「さつさと」

声が一気に低くなった。自分でも普段出さないから聞くのは久しぶりだった。この底冷えするような声、一部の研究者（なじられるのが大好きな変態たち）に大受けの、かなりドスの利いたものだ。

それを聞いたせいとか、震え上がっているフランチェスカが目の前にいるような錯覚を覚えた。

「し、至急！ 急いで、最も早く用意してあげたいっと思う所存でございます！ なのでちょっとだけ辛抱してお待ちになっていただけると助かっちゃったりしちゃいますです！」

意味が不明。それほど混乱しているのだろう。こちら知ったことではないが。

「頼みましたよ？」

「ラジャーです！ ブラボーです！ フランチェスカです！」

……大丈夫なのだろうか？ 酷く不安を覚えながら、連絡を終了した。

とりあえず、明日には届かないだろう。早くて二日作業時間がさらに減ったことを感じて、ため息をつかずにはいられなかった。

第八話 舞台の裏側？ とポンコツという事実が発覚する不遇な機体（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第九話 ラッキースケベと不遇な (前書き)

久しぶりの更新です。……それと生きてます(笑)

一週間という期限は守れませんでした……。それなのに短いつて…

…。

いろいろあると思いますが、どうぞご容赦を願います^^；

第九話 ラッキースケベと不遇な

どうしたこうなった。織斑一夏は現在、自問自答中だ。

自問自答して答えを導き出そうとしているのに……答えはそれに反抗したように出ない。思考が堂々巡り。脱線を繰り返してまともに働かない。そんな中で、状況は動いた。

「な、な、な」

ひらひらと目の前で動く、バスタオルと命名されている布。装着者の動きにあわせてかすかに揺らめいている。それは体にしっかりとみきつけられていることを示していた。

ここで、ようやく己の失態に気がついた。バスタオルを巻きつけているしたのは、当然素肌だろう。それに近いものを見てしまったのだ。多少なりとも罪悪感の沸くというものだ。

「わ、悪い！」

一夏が固定した視線を外し、後ろを振り向いた瞬間、殺気が漏れてきた。濃密で、どろどろとした本物の殺気に、一夏の背中から汗が一筋にじみ出た。

首を左に傾けた。その地点にねらいすましたような一撃が通過。茶色の細長い物体だったなあ、とよけないことを考えるほどに、織斑一夏は混乱していた。（その茶色の物体が一体なんであったのかを理解していいない）

追撃はすぐに。横目で状況を確認しようとしたところで茶色の物体が襲来。再び一夏の命を削らんと、とんでもない勢いで迫ってきた。

「…………あぶねえ！」

当たれば命がけずれるどころか消失してしまう。さすがに命の危機を感じた一夏は滑り込むようにしてドアの元まで駆け抜ける。取っ手にチョップをお見舞いしわずかに開いたドアの隙間めがけて左足。痛みなどかまっていられるわけもなく無視し、部屋を出たところで右肘を入れる。扉の開閉を無駄なくこなして、脱出完了。危険な任務の達成に、一夏は脱力。そのまま地面へと崩れ落ちる。ため息が同時に漏れたのは、安心からだった。

「…………ふう…………。へ？」

左の視界すぐそばに、見慣れた奴がいた。先ほどの襲撃者である。一夏の額から、汗が流れ落ちた。

見間違いではないか？ と考えたものの、その姿に見覚えがあり過ぎた。というよりも先ほど見たばかりだ。そんな簡単に忘れられる類ものではなかった。

あの一撃をもらえば、間違いなく死ぬ。その事実に至った一夏の頭は、今朝の一コマの光景を気合で脳裏から呼び出した。人間危機が迫れば意外にやるものである。それを実感することになった。

「わからないところあれば、聞きにきて。1027にいるから」

そう。確かまともに会話した珍しい人間のうちの一人、エマ又エーラ・モスカという少女がそんなことを言っていたはずだ。記憶力には自信がない一夏だが、これは鮮明に記憶していた。

勉強ではないことなので微妙だが、一夏の生命の危機である。四の五の言っていられない状況。男嫌いといっていたが、この危機的状況でそれをあげられるほど状況はよくない。それらを天秤に掛けて、決断を下す。一夏は1027の部屋へと急いだ。

とたんに蹴破られる木製のドア。というよりも、吹っ飛んだという

のが正解か。いったいどんな力をしているんだ、と幼馴染は化け物じみた実力を持っていると再認識した。同じことをやれと言われてもできる普通の人間に可能な所業ではないのだ。その行為は。……一夏の姉ならばできるだろうが。

猶予がなくなつたことは分かつた。視界の端で追いかけてくる箒を確認しながら一夏は死角を利用して天井に飛びつく。そこを全く顧みずに箒は通過していった。

頭に血が上っていなければ、間違いなく血祭りにあげられていただろう。その事実に至つた一夏の野句をするでは荒々しいものになつた。

ゴンゴンと無骨な音を、何度も何度も響かせる。応答はない。ノックをする時間がとても長く感じる。早く出る、早く出てくれ、早く出てくださいお願いしますとどんどん卑屈になっていく自身を自覚しながら、一夏はドアの先の人物が部屋に在中していることを願つた。その間にも、箒がまた接近してくるのを感じた。どうやら端っこまで行つてから戻ってきているらしい。

時間がない。そんな中で少しの間をおいて、ドアが開いた。

「何？」

「すまん匿つてくれ！」

訝しい視線を送ってくるエマヌエーラが対応した。が、今はそれどころではないのだ。生命の危機という建前を發揮してエマヌエーラが文句を言い切る前に、一夏は部屋に侵入。入室の許可を取っていないにも関わらず押し入り、挙げ句の果てに鍵をかけた。その尋常ならざる行為にふつうなら悲鳴を上げるところだが、エマヌエーラの対応は酷くいびつなものであった。

「お茶、飲む？」

「……。ああ、飲もうかな？」

ため息と同時に、エマはカップを二つ用意。先の事実をまるでなかったかのように茶葉を取り出し、鍋の中に投入。しばらくすると、カップに液体が鍋から注がれた。

「どうぞ」

「……。ああっ！ サンキュ！」

あまりにも自然なエマの対応に面食らいつつも、渡された紅茶を一口。まるやかな風味が一夏の口の中を満たした。

「……。うまいな、これ」

「一応高級品なのよ？ ありがたがって飲んだら？」

「……。紅茶の入れ方なんてさっぱりだから。どうやってたらこんなにまるやかになるんだ？」

その言葉を聞いた途端、エマの表情が呆れを帯びた。その態度に一夏は少しだけむっとした。

「……。色も見てないの？ 一人であわてるのは個人の自由だけど、鈍いにもほどがあるんじゃない？ ふつう気づくと思うけど？」

「……。あ」

そこで一夏は初めて紅茶を確認した。普段一夏が飲んでいるような紅茶 ではなく少し乳白色掛かったその中身。それをみてもわからないほど、栄養がないわけではなかった。というよりも、なぜ飲んだときにわからなかったのか自分でも不思議に思った。

「ミルクティーだったのか。確かに言われてみればそうだったな」

「……で、あなたは紅茶談話をしにここに来たの？」

その言葉に、一夏はよつやくここにきた目的を思い出した。

「かくまってくれ！ このままじゃ殺される！」

「……。このまま私が侵されると言ったら、どちらが優先されることなんでしようね？ ……まあいいわ。いったいなにがあったのかは想像がつくけど、言ってみなさい」

前半にぶつぶつと小声でつぶやいていたエマヌエーラのその言葉を受けて一夏は部屋であった事実を包み隠すことなく伝えた。帰ってきた返事は、ため息だった。

「……。それで？」

「……。いや。で、って？」

なにいつてんだこいつ？ という視線を差し向けられても、一夏には訳が分からない。自分には落ち度はなかったのだ。部屋について気が付いたら幼馴染がシャワーを浴びていて部屋彼出てきて襲われました。言葉にするとそれである。一夏にはまったくもって落ち度というものが身請けられない。それなのにこんな目（木刀で殺人未遂）に遭うなんて理不尽だ！ と主張したのだがどうやら伝わらなかったようだ。

再び口を開こうとして、エマに止められた。

「見るってどういうことか知ってる？」

「……はあっ？」

見る 身によって識別すること。それ以外になにがあるというのだろうか？

そのことを伝えると、何ともいえない微妙な顔をした。何でだ、と文句を言う前にやはりエマに遮られた。

「……何で日本人のあなたより私が詳しいのかわからないけれど……。はあ。いいわ、教えましょう。古来、身分の高い女性というのは直接顔を異性と合わせることはないの。見ると言うこと、それはすなわち結婚を意味する言葉なの」

「……はあつ！ それはおかしいだろ！」

「なんだそれは？ と言いかけて、やめた。これ以上知識がないのを暴露するのは恥ずかしいし、なによりもエマに知られたくないと思っただから。なぜか？ といわれてもそんなことはわからない。幼なじみである筈だったらどうだろうか？ と言う考えに至る前に、致命的な事実を突きつけられた。まあ、無知を知られるのは恥ずかしいものだしな、とその場限りのこととして結局ごまかした。」

「素養がないのは知っているから、気を使わなくていいわ。むしろ知ったかぶられる方が迷惑。わからないんならそう素直に言って頂戴。……身の程が知れるわよ？」

「……はい、すみません。なんかもう、全面的にごめんなさい」

平身低頭。一夏はただただ頭を下げることしかできない。もしかしたら千冬並に頭の上がない人物になるのではないかという予感は無視した。それが事実であれば、あまりにも悲しすぎる。同年代の女子に頭が上がらないなんて。

そんな一夏の心境はつゆ知らず、エマ又エーラは講釈を続ける。

「それだけ慎み深かったってこと。それは現代においても受け継がれているところはあるんじゃないの？ あなたという理性に見られて我を失ったと押ししても少しも不思議じゃないわ」

なるほど。一夏は素直に感心した。まあ、確かに異性に身体を見られたって言うてもおかしくない状況だしなあ……。

とそこまで考えてようやく、一夏の頭に一つの事実がよぎった。

「それとこれとは別問題だろう！」

「……あら、ばれた？」

全く悪気なくころころとのを震わせるエマヌエーラに、一夏は怒りをぶつける気が失せた。ようは遊ばれていたのだ。それを思い知ると、少しだけバツが悪くなった。……同年代の女子に（以下略）

「まあ全くの無関係というわけでもないんでしょう？ 何せバスタオル一枚羽織っただけの姿を見たのは事実なんだし。それもその場で呆けていたことをいいことにたつぷりと眺めちゃうじゃないの？ それこそ、変態親父の視線と変わらないくらいに」

「……うっ！ いや、だがそこまではひどくないぞ！」

事実である。それを付かれると言葉に詰まってしまおうが、反論はある。

「あれは事故だって！ 悪気はなかった！」

「かもしれないけれど。見たのはあなたの責任だわ。というか本当にまじまじ見たのね……。目を何かで覆うこともできたでしょうに」

「……ぐう！」

ぐうの音は辛うじて出たが、それ以上はいえない。これは明らかに一夏の非であったと一夏自身、認めてしまったからだ。

万事休す。神は死んだと脳内の自分に語りかけようとしたときに、救いの手は差し伸べられた。

「まあ今回のことは篠ノ之さんに非があるのも事実。誠心誠意謝れば案外許してくれるものよ？ 事故なんだしね」

だから早く謝ってきなさい、と言う応援に背中を押されて一夏の心は少し軽くなった。

悪いことは謝ればいい。いくら相手が認めなくとも、認めるまで誠意を尽くして謝り続ければきっと相手は理解の意を示す。それを再確認して一夏はドアノブに手を回した。

ガチャリ、と音はした。したのだが、ドアは反抗して開こうとしない。

どういうことだ？ 一夏はここにきたときの経緯を脳内で再生した。走ってきて勢いよくノック エマが戸を開く 彼女を押し退けて部屋に侵入 そのまま押し入ってドアの鍵を閉める。以上。

「……………」

「俺、かなりまずいことしてないか？」

「今更気が付いたの？ 動揺していたとしても、言い訳できないわよ？ ほかのこの部屋に行くときにはしないことをお勧めするわ。下手をすると出席簿クラッシュじゃすまなくなるわよ？」

「……………肝に銘じておきます」

つくづくエマに頭が上がらない一夏であった。

第九話 ラッキースケベと不遇な
(後書き)

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第十話 乙女と不遇 体(と)ころどころ文字が消えている(それに操縦者(前

皆さん、本当にお待ち同様でした。

完成です。つてかもう周知更新は無理です……。不定期更新は、ま
ずいですか？

……。ああ、一日二本はつらいですよ……

第十話 乙女と不遇 体(ところどころ文字が消えている)それに操縦者

篠ノ之箒は、絶賛混乱中だった。

「見られた。よりもよつて、一夏に……っ！」

そうなのだ。バスタオルを羽織っていたとはいえ、その姿を見られたのだ。

ふつつの男子ならば、記憶を失うまで殴り続ければいい。その後のことなど知ったことではない。それほど重要なことにはならなかったはずだ。そう、それがふつつの男だった等の場合だ。

「……」

だが、織斑一夏は違う。彼女の思い人であり、幼なじみであり同門でもある。過去をともに過ごしてきた、間違いなく大切な人だ。

それに自分のあられもない姿を……。箒の顔が沸騰するかのようになり、赤くなる。頭がくらくらとして、まともな思考を維持できない。

おかしくなってしまったのだろうか？ イヤでも、と訳もなく思考の堂々巡り。答えなど出るはずがないのにも関わらず、思考を繰り返す。

「……だめだ。わからない」

幼なじみである、一夏。どんなに時が過ぎようとも、その事実だけは変わらない。過去のある地点で止まっていた姿から、凛々しくなった今を重ねて。会えなかった日々を埋めるようにして、過去を振り返る。

「……私は、一夏のことを……」

止まってしまおう言葉。一夏を思うのは幼なじみとしてだろうか、それとも同門、いやクラスメート。どれも当てはまらない。ではいったい箒はなにを思うのか。

「いや、だって髪型一緒だし。気付かないわけがないだろう、大事な幼なじみなんだから。にしても、きれいになったよな、本当に」

それ以上を。異性に向ける恋という名の情熱をただひたすらに差し向けて欲しかった。

彼女を、箒を只の篠ノ之箒として見てくれる世界で唯一の異性である織斑一夏に。

その思いが、これまで決して口にさせなかった事実をとつと吐き出させた。

「……好きだ。大好きだ。言葉だけじゃ足りない。狂ってる。求めている。奪って欲しい。もう私は、一夏なしの世界など信じられない……っ！」

止めどなくあふれた言葉は空中にさまよい、宛もなく滑空。されど霧散することなく事実だけを箒に突きつけていた。

認めてしまえば、簡単だった。今まではつきりしなかった事実が、簡単に浮き彫りになった。

授業中、睨み付けてしまった。なんてことはない。只見知らぬ女に一夏が見とれていて、女として負けた気がして、一夏を取られてしまったような気がして悔しかったのだ。されどどこにも苛立ちをぶつけることが出来ずに結局一夏に当たるような真似をした。

バスタオル姿を見られて、思わず竹刀で襲いかかった。簡単なことだ。女らしくない筋肉の付いたこの体を見られたことが、一夏とい

う特別な異性に裸同然の姿を見せたことが恥ずかしかったのだ。屋上で甘い言葉をかけられて思わず高揚した。そうだ、なにも悩むことはない。女として試してもらえたことが、何にもまして幸福だったのだ。六年という長い歳月を経て、一夏も成長し箒に女を感じる事が出来たという事実を知って至福な思いを浸っていたのだ。

「……ふふっ」

笑いが、勝手に漏れた。

「ふふっ、ふふふ」

そくだ。何も恥じるところはない。どうせ嘗みを行えば一度は経験するのだ。何を恥じらう必要があったのだ。箒は数分前の自分をあざ笑って、反省を促した。

一夏は渡さない。どんな女ががなんと言おうとも。たとえそれが姉という一夏唯一の肉親である織斑千冬であっても、だ。

改めて、箒は鏡を確認する。反射して映った自分の像を確認。

ほかの女子よりのも少しだけ長い背丈。お世辞にも柔らかい印象というものを感じるこの出来ない酷くつり上がった目。剣道をするときにいつも邪魔だ邪魔だとばかりに疎んでいた大きく膨らんだ胸部。そこから続く筋肉質の腹部と脚部。

それらを人目で見て、箒は一度大きくうなずいた。(ちなみに未だに着替えていないためバスタオルを簡単には織った姿のままである) 笑顔を作ろうとして、失敗した。変に顔が崩れて、とてもではないが人様に見せられないものになってしまった。

「……むっ、笑顔とは難しいものだな」

女なのだから媚びるときの笑顔一つくらいあった方がいいだろうと

いう安直な考えの基での行動だったが、当てが外れてしまった。意識すればするほど、笑顔というものは作れない。そのことを思い至った篤は、今日の幸せな出来事を思い浮かべる。

「……っ！」

これならば、と思ったそれは、瞬時に撤回。

「なんだこれは！ ゆるみきった顔つきではないか！ こんなので一夏が気づくか！」

むしろ頭の心配をされそうだった。幼なじみの鈍感さは群を抜いている。たまにわざとしているのではないかと疑いたくなるくらい在所行を平気で見せるのだ。ほかの女に。篤としては溜まったものではない。メラメラ、と内心で炎がくすぶる。

「これではダメだ」

ほかの女に嫉妬など見苦しいにもほどがある。恋人同士ならまだしも、今はまだ只の幼なじみである。いずれそうなるうが、今はまだその段階に至っていない。よけいな行動は好感度を低下させるだけ。それに篤の心臓にも悪い。

今は一夏の心をしっかりとつかむことが何よりも先決だ。では一体どのようなすれば鈍感極まりない一夏の心を驚頭紙にできるのか？ というこの段階まで篤の思考は至ったが、そこから先に進まない。篤に恋の経験などあるはずもない。だからいったいどのようなしたら異性の心をつかめるのかが分からないのだ。袋小路に陥った。

「……ダメだ……わからない。いったいどのようにすれば……っ！」

もつともまだ時間に猶予はある。今すぐ解答にいたらなければならぬというほどせっぱ詰まっていけない。弱音を吐きそうになった自分に喝を入れる意味で、ほほに力を入れた平手をたたきつける。ぴしゃり、と乾いた音とともに、その行為をしたことを箒は公開した。気合が入り過ぎたらしかった。

少しずつ、女として意識するように自分を磨いていこう。

とりあえずの方針が固まったとき、部屋の穴があいた（箒の竹刀が唸って開けさせた）ドアが来訪者の存在を告げた。

「誰だ？」

「……篠ノ之さん、入っていいかしら？」

一夏がきたのか！ と喜びかけた箒は落胆を隠せない。のだが来訪者、つまりは客である。どんな用件かはわからないが、失礼な対応をするわけにはいかなかった。完全に落ちてしまった頬を両の掌で押し、頬の筋肉を引っ張りあげて、来訪者を迎えにいった。

「どうした？」

「……あからさまにがっかりした顔を向けられても困るのだけれど、ごめんなさいね、愛しの織斑君じゃなくて」

「な、ななな」

ぎぎぎ、と首を小刻みに動かして、来訪者の顔をのぞく。

整った顔のパーツ、そしてそれを局地的に覆い隠すサングラスが特徴のイタリア代表候補生エマヌエーラ・モスカ。一夏が朝に凝視していたその人である。いったい何のようなのか、そして先ほどの言葉の真意は……。

エマヌエーラが、唇を少しゆがめた。見えないはずなのに、目元が

光ったように箒は感じた。

「あれだけ睨み付けられれば、イヤでも気が付くわ。篠ノ之箒さん？ ずいぶんとまあ大胆な格好なのね。ファッションなの？」

そこで、箒は自分の体に視線を落とした。シャワー室から出た、バスタオルを一枚は織っただけの体のラインを浮き上がらせている扇情的な格好ままだった。

「……っ！」

「……とりあえず、話は着替えてからね」

ため息をはいたエマヌエーラに、箒は俯いて素早く着替えるところしかできなかった。

待たせるのも悪いと思い、出来るだけ早く身なりを整えた。部屋の前で待機してもらっていたエマヌエーラ入室してもらおう。

「で、どんな用件だ？ おちおち訪ねてくるほど、イタリア代表候補生というものは暇があるのか？」

「……。いきなりツンツンされても困るのだけれど。特に何もした覚えはないし」

先程から絶えず吐息を生産するエマヌエーラの態度に眉をひそめる。顔つきが呆れから苦笑に変化した。

「織斑一夏」

「っ！」

「ほんと、分かりやすいわ。さすがにここまであれだとうっしりしようもないわね」

それは私に言っているのか、と叫び出す前にエマヌエーラは注射を加えるのを怠りはしなかった。

「ああ、織斑一夏の話ね。もはやこんなに可愛い幼なじみの大胆なアプローチに気が付かないなんて……。さすが、日本の殿様というのはいろいろとすごいよね。出来れば近づきたくない人種であるのは間違いないけど」

「何の話だ！　そしていつの時代のことを言っているんだおまえは！　それに私が可愛い、だと？　おまえに言われても何にも嬉しくない！」

「調子が出てきたようで安心したわ。それと冗談よ、ムキになっていると疲れるわ。まあ、可愛いかは別として、あなたの容姿が整っているのは間違いないのだけれど」

「……」

声を荒げた際に乱れた呼吸を整えて、箒は今一度目の前の人物を注視した。

目元を除いた各部は、まさに神に与えられたごとく奇跡的な最高水準のバランス。まさに理想、とさえいえるほどの容姿の持ち主だ。それに整って言われたところで、バカにされている気はしない。箒は寄っていた眉間のしわを伸ばした。

「モスカ、用件ならば手早くすませてくれ。私とて暇ではない」

「そうね、だからしても仕方がないのは事実だし」

では今までの押し問答の意味は、と叫んだところでまた主題から脱線していくだけだ。決して自分自身のペースになど持ち込ませてくれない。自分の都合で相手を自分の土俵に上がらせる。それに当たる該当者を思い出さないようにして、箒は続きを促した。

「ある程度の事情把握しているのだけれど、今どこにいるか知らない？」

「……。待て、何でおまえが事情を知っている？」

そもそも短い時間で、さらに騒ぎに発展する前に一夏は逃げ去った。目撃者はいなかったところ箒自身が確認している。箒を予想の斜め上を。その解答は滑空した。

「私の部屋に逃げ込んできたの。わかった？」

「……………はあ？」

「だから、私の部屋に避難したのよ。というかほとんど押し入られたんだけど」

「待て待て、意味が分からないぞ？」

一夏は逃げていった。木刀を振りかざした箒を恐れて。それは事実だ。そして今一夏の行方がわからないことも。

混乱している。箒自身それはよくわかっている。わかっているのだが、こういう時に限って頭は働いてはくれない。もどかしい。出口のない迷路をさまよっていた。

それを知ってか知らずか、エマヌエーラの手加減はない。混乱しているのにも関わらず、次々と重い常駐ソフトを立ち上げるのだ。箒としてみたら、溜まったものではない。ないのだが、文句を言うことさえも出来ない。結果、そのまま身を任せることに。

「あなたの部屋を出てきた織斑一夏、面倒ねこの際 とするわね。

はどこかに避難しなければ到底逃げることが出来ないと言うことを自覚していた。……………あなたが剣道の全国大会覇者だという事実を知っていたのね。

さて問題よ。ここで が逃げきるためにはどうすればいいでしょう？
知っての通り此処の廊下はホテルのような形を取っているのでは

らく直線が続く。曲がり道も途中に存在するけどこの際ポジシヨンのに除外されるわ。だったらもう壁もしくは天井に張り付く・どこかの部屋にかくまってもらう等々の行動によってあなたの視界から消え失せるしかない。……言いたいとはわかった？」

「……つまりは、それがおまえの部屋だったということか？」

「ご名答。まあ付け加えるなら部屋に飛び込むのは騒ぎにならないというのが大前提だったから。騒がれればいとも簡単にあなたに察知されるでしょう？ だから織斑一夏は賭に出た」

「飛び込み。それも押し入りか。来客者を装つての」

頭が爆発しそうだ。知恵熱でも出るんじゃないかというくらい働かされて暖かく（熱く）なっている。処理能力すれすれのところを耐えきった筈だったが、言葉が出なかった。

一言で言えば、絶句。

私の幼なじみは、とうとう畜生にまで身を竊したか、と。

「だが、私は見捨てないぞ。一夏、おまえがきちんと人間に戻るまで、私がしっかりきっちり面倒を見てやる。なんたって私はおまえの幼なじみだからな」

「……つつこみ所が多すぎてつつこみたくないのだけれど一つだけ妄想の口に出すのはやめて頂戴。さすがに見えていて恐ろしいわ」

人間とはまた別の生物を見る視線を浴びせられて、筈は現実復帰。口元を袖で拭ったところ、なにやら液体が付着していた。両頬を力の限り叩いた。

「……すまない。みつともないところを見せた」

「もういいわ。気にしてないから。じゃあ織斑一夏は此処にはきていないのね？」

「ああ。少なくとも私は見ていない」
「そう」

話を打ち切って、エマヌエーラが扉の方へ歩きだした。用件は以上らしい。いったい何のためにきたんだと思わなくもなかったが箒は口には出さなかった。

「お邪魔虫はとっとと退散するから、そんな怖い顔でにらまさないで頂戴」

バレてはいたようだが。

「それと」

取っ手に手をかける瞬間、エマが振り返った。まだ言い足りないのか。うんざりしていた箒に、エマヌエーラは意地悪く笑った。それでも気品が失われていないのは不公平だろう、とグチりながらも箒は次の言葉を待った。

「亭主の手綱は常に握っておかないと。ふらふらとその辺で変な女捕まえてきてしまうわ、きつと」

「ば、ばばばばかっ！ て、てて亭主だと！」

それだけいうと、エマヌエーラは本当に部屋を出ていった。何しにきたのかは結局最後までわからなかったが、貴重な情報も得ることが出来たので相殺。

「亭主、か」

夫婦。その指し示すことはつまり……。

その瞬間、顔が沸騰するかのようになり、一人で赤面した筈は、同居者を見つけた瞬間に問答無用で鎮圧しにかかった。

「ほ、筈！ ま、待てっ！ 俺が悪かった、いや何が悪かったのかわからないがそれでも。ちょ、話せばわかる！」

当然、理解されなかった。

第十話 乙女と不遇 体(と)ころどころ文字が消えている(それに操縦者(後

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

……… 確実にもう一つの作品に影響を受けている、このシリーズです

^^^ ;

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9474s/>

IS イタリアの姫と不遇な機体

2011年7月11日22時50分発行